

県営ほ場整備事業(現和地区)
に伴う埋蔵文化財発掘調査

赤 木 遺 跡
下 剝 峯 遺 跡
大 四 郎 遺 跡
内 和 遺 跡

1978年 3月

鹿児島県西之表市教育委員会

序 文

昭和52年度県営圃場整備事業が、実施されるに当り、本島北部東海岸台地の赤木、下剥峯、大四郎、内和の四地区の埋蔵文化財発掘を、国、県の補助事業として、県文化課の協力で、西之表市が、主体となって行ったものです。

此処は、昨51年度に発掘調査を行った田之脇台地指辺の東隣に位置して、庄司浦台地にあたります。

かねてから、指辺遺跡同様、遺物が採集され、更に事前調査の結果広範囲にわたる遺跡であることが、判明しました。11月から、本年1月まで、地元の人たちの農作業の合間をさいていただき、日程もぎりぎりに予定の作業を、無事終えることが、できました。

この地区は、太平洋からの風雨による所為か、表上が浅く、日頃農作業の折に土器、石器が、出土したところで、完全な遺跡の発掘には、困難が、想像されたが、発掘担当者並びに、地区民の周到な作業により、貴重な遺物が、出土したことは、誠に感謝に堪えません。

ここに、その結果を報告書としてまとめ、広く市民の理解を得、あるいは、研究者の参考に供するために、発刊することになりました。

なお、発掘調査から、報告書の発刊にいたるまで、御協力いただきました鹿児島県教育庁文化課の方々に、深く感謝いたします。

先祖の遺産を、由なき破壊から、守るとともに、市民各位のより一層のご協力を、お願いする次第です。

昭和53年3月20日

西之表市教育委員会
教育長 小原秀丸

例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（西之表市現和地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。発掘調査を行った遺跡は、赤木・下剝峯・大四郎・内和遺跡である。
2. 報告書作成にあたり、遺物について県文化財審議会委員河口貞徳氏文化庁調査官小林達夫氏の助言を得た。
3. 航空写真及び地形図は、西之表市所有を使用した。
4. 本書に用いたレベルの数値はすべて海拔絶対高である。
5. 本書の執筆は、次のとおりである。

第2章、第3章、第4章、第5章第3節	新東晃一
第4章第2・3節、第5章、第6章	立神次郎
第1章	鮫島安豊
6. 遺構・遺物の写真は新東が担当し、編集は、立神・新東でおこなった。

本文目次

第1章	遺跡の環境と周辺遺跡	8
第2章	発掘調査の経過と概要	19
第1節	発掘調査の経過	19
第2節	発掘調査の概要	22
1.	発掘調査の方法と発掘調査の概要	
2.	遺跡の層位	
3.	各遺跡の調査	
第3章	赤木遺跡の調査	25
第1節	調査の概要	25
第2節	遺構・遺物	27
第3節	ま と め	27
第4章	下利峯遺跡の調査	29
第1節	調査の概要	29
第2節	遺構・遺物	34
第3節	ま と め	77
第5章	大四郎遺跡の調査	86
第1節	調査の概要	86
第2節	遺構・遺物	88
第3節	ま と め	88
第6章	内和遺跡の調査	89
第1節	調査の概要	89
第2節	遺構・遺物	90
第3節	ま と め	91
	あとがき	92

挿 図 目 次

第1図	種子島の位置図	8
第2図	遺跡周辺航空写真	10
第3図	周辺遺跡分布地図	11
第4図	周辺遺跡出土遺物 (I)	13
第5図	周辺遺跡出土遺物 (II)	14
第6図	周辺遺跡出土遺物 (III)	15
第7図	周辺遺跡出土遺物 (IV)	16
第8図	周辺遺跡出土遺物 (V)	17
第9図	周辺遺跡出土遺物 (VI)	18
第10図	遺跡の位置と周辺地形	23
第11図	赤木遺跡周辺地形とトレンチ配置図	25
第12図	赤木遺跡土層断面実測図	26
第13図	赤木遺跡5 トレンチ平面実測図	26
第14図	赤木遺跡出土遺物	28
第15図	下剥峯遺跡周辺地形とグリッド配置図	29
第16図	土層断面図 (6・7・8-C・D区)	30-31
第17図	遺物類別出土状態	31
第18図	地層断面図 (2A-9A区)	32-33
第19図	集石I実測図	34
第20図	集石II実測図	34
第21図	2-9-A~B区IV層平面図	36-37
第22図	114土器出土平面図	38
第23図	114土器出土状態	38
第24図	114土器復原図	38
第25図	I類土器	39
第26図	II a類土器 (I)	40
第27図	II a類土器 (II)	41
第28図	II a類土器 (III)	42
第29図	II a類土器 (IV)	43
第30図	II b類土器 (1)	45
第31図	II b類土器 (2)	46
第32図	II b類土器 (3)	47

第33図	Ⅲc類土器(1)	48
第34図	Ⅲc類土器(2)	49
第35図	Ⅲc類土器(3)	50
第36図	Ⅲc類土器(4)	51
第37図	Ⅲc類土器(5)	52
第38図	Ⅲc類土器(6)	53
第39図	Ⅳ層出土の石器	54
第40図	Ⅲ類・Ⅳ類土器	56
第41図	Ⅳ類・Ⅴ類土器	57
第42図	Ⅴ類土器	57
第43図	Ⅵ類土器(1)	59
第44図	Ⅵ類土器(2)	61
第45図	Ⅶ類土器	62
第46図	Ⅱb層出土石器(1)	64
第47図	Ⅱb層出土石器(2)	65
第48図	Ⅱa層出土の弥生式土器(1)	67
第49図	Ⅱa層出土の弥生式土器(2)	69
第50図	Ⅱa層出土の弥生式土器(3)	71
第51図	Ⅱa層出土の弥生式土器(4)	72
第52図	Ⅱa層出土の弥生式土器(5)	73
第53図	Ⅱa層出土の石器(1)	75
第54図	Ⅱa層出土の石器(2)	75
第55図	大四郎遺跡周辺地形とトレンチ配置図	86
第56図	大四郎遺跡平面図・土層断面図・出土遺物実測図	87
第57図	内和遺跡周辺地形とトレンチ配置図	89
第58図	内和遺跡出土遺物	90
表1	種子島における曾畑式土器分布表	9
表2	種子島における礪石系土器分布表	9
表3	周辺遺跡出土遺物図版出土地名表	12
表4	各遺跡の層位	24
表5	磨製石鏃出土地名表(鹿児島県)	83

図 版 目 次

図版 1	①赤木遺跡遠景	93
	②赤木遺跡層位	
	③赤木遺跡 (3・4・5 トレンチ)	
図版 2	①赤木遺跡 (1 トレンチ)	94
	②赤木遺跡 (5 T 拡張区) IV 層面	
図版 3	① 5 T 拡張区 IV 層土器出土状態	95
	②赤木遺跡出土遺物 (59)	
図版 4	①下剝峯遺跡遠景	96
	②下剝峯遺跡近景	
図版 5	①下剝峯遺跡確認調査風景	97
	②下剝峯遺跡層序	
図版 6	① II a 層弥生式土器出土状態	98
	②弥生式土器出土状態 (壺)	
図版 7	①弥生式土器出土状態 (甕)	99
	② II b 層遺構遺物検出風景	
図版 8	① II b 層出土遺物検出状態	100
	② II b 層検出状態遠景	
図版 9	① IV 層検出状態遠景	101
	② IV 層土器出土状態 (114 土器)	
図版 10	① IV 層土器出土状態 (146 土器)	102
	② IV 層土器出土状態 (157 土器)	
図版 11	①集石 I 検出状態	103
	②集石 II 検出状態	
図版 12	① I 類土器 (左: 60・右: 61)	104
	② II 類土器 (113)	
図版 13	① II a 類土器 (62 ~ 71 配列実測図と同じ)	105
	② II a 類土器 (75 ~ 81・同)	
図版 14	① II a 類土器 (102 ~ 111・同)	106
	② II a 類土器 (112)	
図版 15	① II b 類土器 (115 ~ 126・配列は実測図と同じ)	107
	② II b 類土器 (127 ~ 136・同)	
図版 16	① II c 類土器 (156 ~ 166・同)	108
	② II c 類土器 (167 ~ 176・同)	
図版 17	① II c 類土器 (150 ~ 155・同)	109

	② II c 類土器 (182~194・同)	
図版18	① II c 類土器 (177~181・同).....	110
	② II c 類土器 (210~219・同)	
図版19	① II c 類土器 (149).....	111
	② II c 類土器 (238)	
図版20	① III 類土器 (244).....	112
	② III 類土器 (245)	
図版21	① III 類土器 (246) 表, 裏	113
	② III 類土器 (247・248) 250・249)	
図版22	① IV 類土器 (251・253) 252・254).....	114
	② IV 類土器 (257~261 配列は実測図に同じ)	
図版23	① V 類土器 (263の推定復元).....	115
	② 263 土器の文様施文	
図版24	① VI 類土器 (264・265・266) 267・268・269).....	116
	② VI 類土器 (270・271・272) 273・274・275)	
図版25	① VI 類土器 (277・278) 279・280).....	117
	② VI 類土器 (281・286・288) 282・287・289)	
図版26	① VI 類土器 (285・290).....	118
	② VII 類土器 (293)	
図版27	① 弥生式土器 (壺形土器).....	119
	② 弥生式土器 (甕形土器)	
図版28	① 弥生式土器 (甕形土器).....	120
	② 弥生式土器 (甕形土器底部)	
図版29	① IV 層出土の石器 (243).....	121
	② II b 層出土の石器 (294・295)	
図版30	① II b 層出土の石器 (296・297・298).....	122
	② II b 層出土の石器 (299・300・301)	
図版31	① II b 層出土の石器 (302・304) 303・305).....	123
	② II a 層出土の石器 (374・375・376)	
図版32	II a 層出土の石器 (377・378).....	124
図版33	① 大四郎遺跡遠景	125
	② 大四郎遺跡拡張区調査風景	
図版34	① 大四郎遺跡出土遺物	126
	② 内和遺跡全景	
図版35	内和遺跡出土遺物	127

第1章 遺跡の環境と周辺遺跡

種子島は、九州本土最南端佐多岬より、およそ54km南下した東経約131°、北緯約30.5°の南西諸島最北部の島である。種子島の南西には、古代史上、種子島と同じ文化圏に属する屋久島があり、その南には、孤状に点々とトカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島と続いている。尚、奄美大島と種子島・屋久島の間には、南帯と北帯の生物の棲棲域を示す波瀬ラインがある。

先史土器の様相から、九州本土文化の影響を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を南島北部圏、奄美諸島・沖縄諸島を南島中部圏、宮古・八重山諸島を南島南部圏と区別している（註1）。北部圏は、いわゆる南九州文化圏、中部圏は、奄美の宇宿上層・下層式を沖縄の伊波・茨堂出土の土器を標式とする南島式土器文化を有する文化圏、南部圏は、外耳土器で代表される八重山式土器を有する文化圏である。

種子島は、南北に54km、東西の最も幅広い部分で12km、最狭部6kmと細長く、島の中央部を南北に走るシワ状の山陵は、最高部で282.3mと全体からみて低く平坦な島である。中央に走る山陵の東・西では、少々植生も異り、比較的西側には、砂浜が発達するが、東側では、断崖に富んでいる。

種子島における縄文時代前期の土器は、曾畑式・轟式・塞ノ神式・平袴式土器で、南九州の出土状況と同様、西日本文化の影響をストレートに受けている。

しかし、最近、表探資料であるが、現和田ノ脇東方ノ平での押し引き文・連続刺突文を特徴とする嘉徳遺跡（註2）出土に類似する土器や、面縄東洞式（註3）に酷似する南島タイプの土器が発見されている。今後、このような資料は、当然種子島の地理的条件からみて増加するものと思われる。以下、曾畑式土器・轟式土器の種子島における分布状況を述べてみたい。

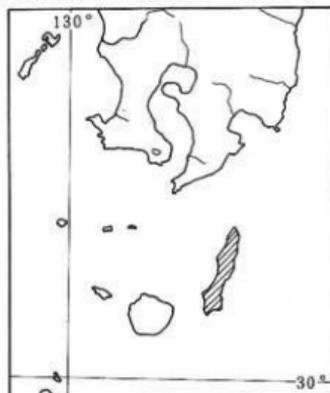
曾畑系土器は、次の表に示すとおり、およそ13ヶ所が知られている。

出土する遺跡の地形は、ほとんどが砂丘地に立地している場合が多い。なかでも、④城ノ浜遺跡、⑨小浜遺跡は、極めて低く海拔数メートルにすぎず、当時の海進、海退を考える上で参考となる遺跡である。

種子島の曾畑式の文化は、極めて広汎に盛行したとみられる。

轟式系土器は、下表のとおり7ヶ所が知られている。

①東方ノ平遺跡は、すでに遺跡は破壊されているが、器厚は極めて薄く黒褐色を呈し、口縁



第1図 種子島の位置図

部周辺部にミズバレ状の貼付文を有し、内面に貝殻条痕文を施している。

②二本松遺跡は、種子島で最も高い山岳地帯の傾斜面に位置している。極めて厚手の土器で内外ともに強い貝殻条痕文を施し無文である。砲弾状の底部を有するものもある。

③池ノ久保遺跡は、西之表市街地より北へ2kmの西海岸に面した位置にある。器壁は、薄くてもろい土器で、胴部から口縁部にかけて二条の波状平行隆起線文を有する。内外ともに、①②でみられた条痕は認められない。

④⑤⑥⑦は、苦浜式土器（註4）と呼ばれるもので貝殻条痕文土器の手法を採用した種子島独自の土器とも考えられている。

表1 種子島における曾畑式系土器分布表

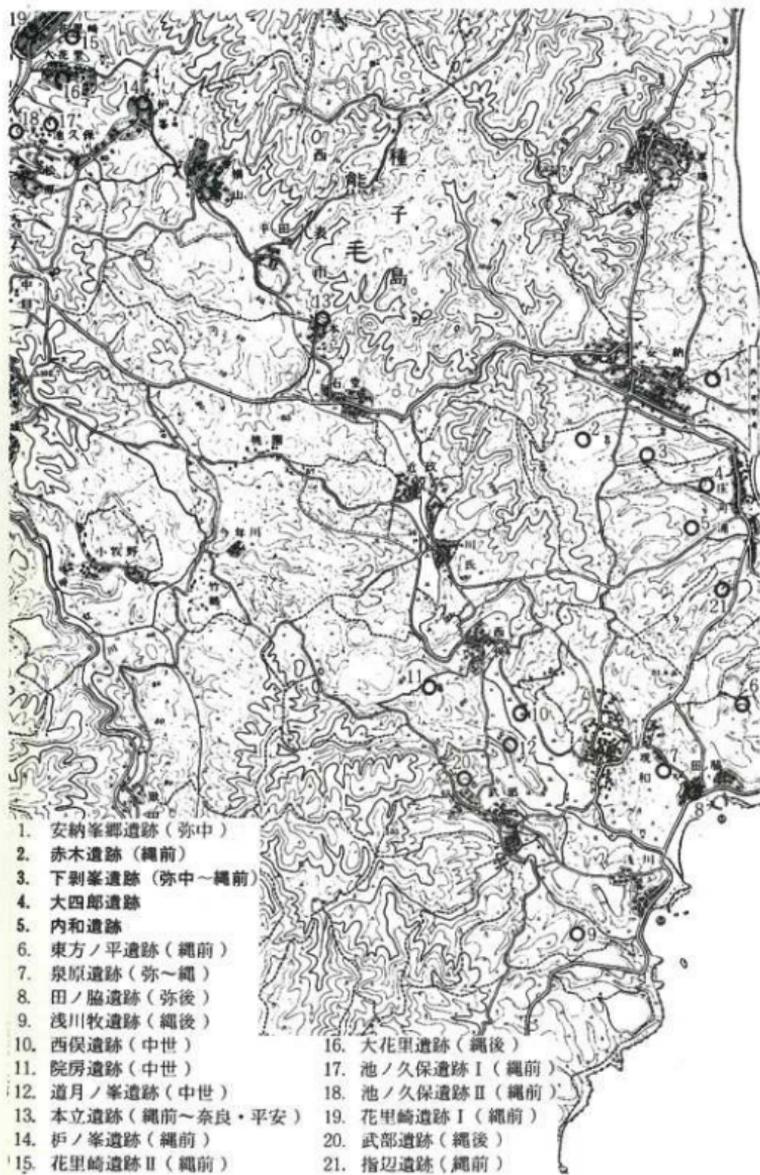
番号	遺跡名	所在地	地形	出土遺物	備考	文献
1	本城	西之表市松島本城	砂丘	磨製石斧、扁平石斧 石皿、敷石		
2	寺ノ門	西之表市国上寺ノ門	平地	市来式		註1
3	池ノ久保	西之表市上西池ノ久保	砂丘			註5
4	城ノ浜	西之表市鶴女町城ノ浜	砂丘	市来式・一漢式		
5	花里崎Ⅰ	西之表市上西花里崎	砂丘	打製石鎖		註6
6	花里崎Ⅱ		砂丘	型式不明		註6
7	本立	西之表市本立 農試場	平地			註1
8	指辺	西之表市現和指辺	台地			註6
9	小浜	西之表市国上小浜	砂丘	縄文後期土器・貝製劍	貝塚	
10	柳原	西之表市伊関柳原	台地		一部破壊	
11	中田	中種子町坂井中田堤	斜面地	市来式土器		註1
12	千草原	中種子町増田郡原	台地	塞之神式 苦浜式・轟式		註1
13	二十番	中種子町増田二十番	台地	一漢式・磨製石斧凹石		註1

表2 種子島における轟式系土器分布表

番号	遺物名	所在地	地形	出土遺物	備考	文献
14	東方ノ平	西之表市現和東方ノ平	台地		ミズバレ状	
15	二本松	西之表市古田二本松	斜面地	石匙 石鏃 垂飾	貝殻条痕	
16	池ノ久保	西之表市上西池ノ久保	砂丘	凹石 敷石	ミズバレ状	註5
17	千草原	中種子町増田郡原	台地	曾畑式・塞之神式・苦浜式 打製石斧	苦浜式	註1 註1
18	高峰	中種子町野間高峰東牧場	平地	塞之神式	苦浜式	註1
19	女洲	中種子町油久女洲	海岸段丘	磨製石斧	苦浜式	註1
20	苦浜貝塚	中種子町坂井屋久津	川床	打製石斧・石鏃・獣骨	苦浜式	註1



第2図 遺跡周辺航空写真 1. 赤木遺跡 2. 下剥峯遺跡 3. 大四郎遺跡 4. 内和遺跡

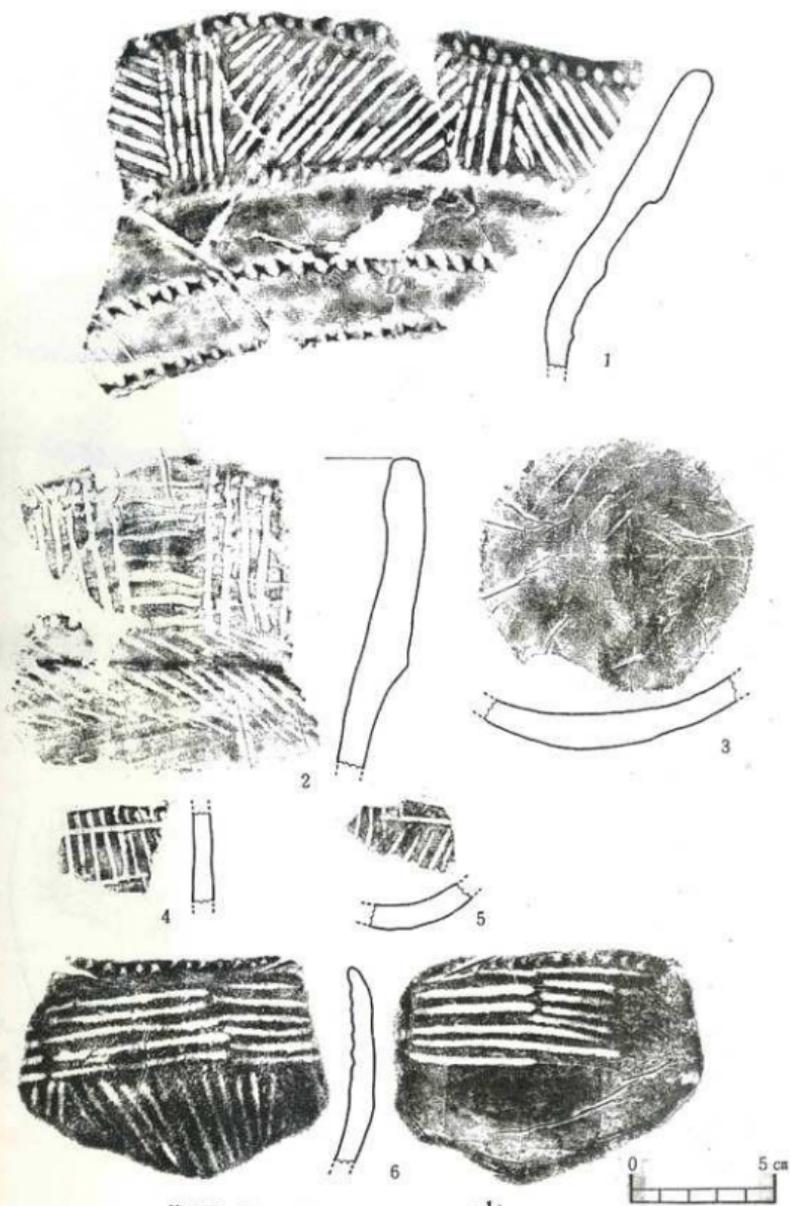


第3図 周辺遺跡分布地図

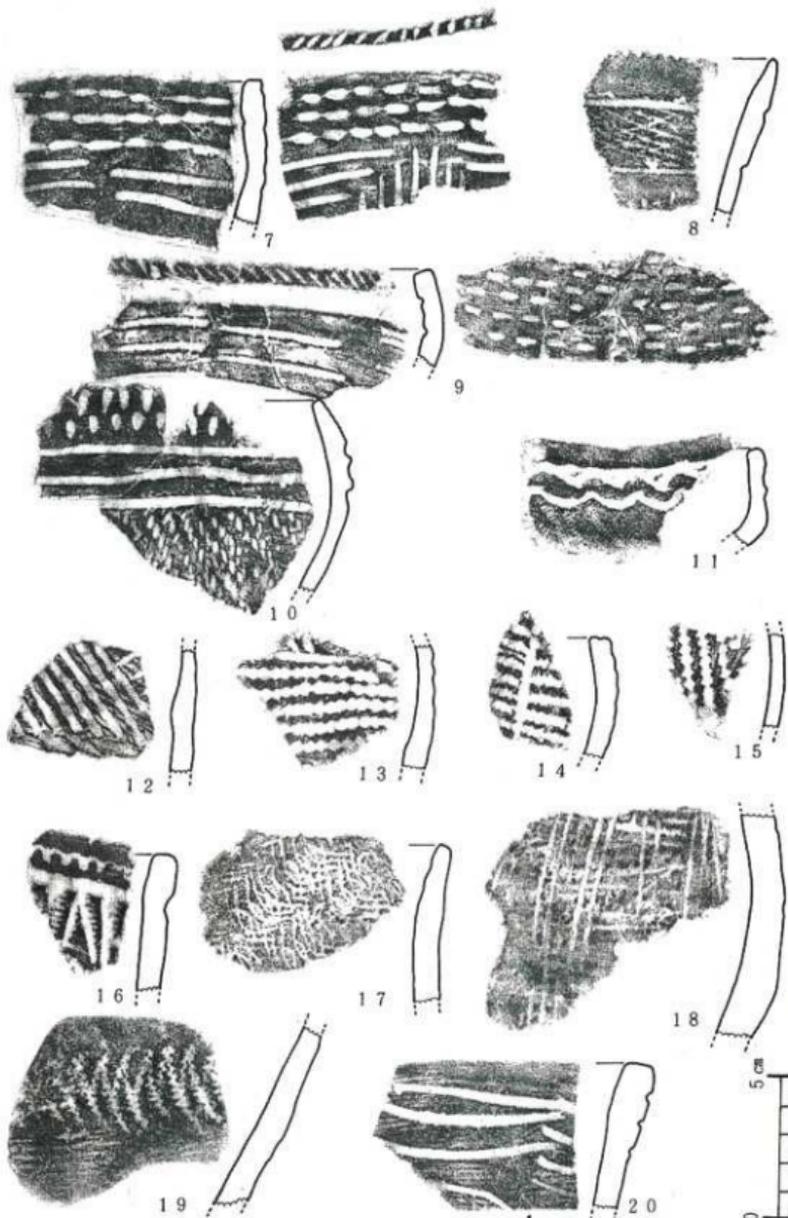
- 註1 盛園尚孝(1971)「先史時代」中種子町郷土誌
 註2 河口貞徳他(1974)「嘉徳遺跡」鹿児島県考古
 註3 河口貞徳(1974)「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古9号
 註4 盛園尚孝(1953)「種子島苦浜貝塚について」古代学研究8号
 註5 鮫島安豊(1978)「池ノ久保遺跡概観」潮流 第1号
 註6 鹿児島県教育委員会(1977)鹿児島県遺跡地名表

表3 周辺遺跡出土遺物図版出土地名表

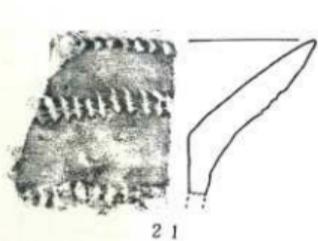
図版	番号	型式名				出土地	表番
第4 図	1	平楕式土器				西之表市古田二本松	15
	2	型式不明				西之表市国上小浜貝塚	9
	3, 4, 5	曾畑式土器				西之表市国上小浜貝塚	9
	6	曾畑式土器底部				西之表市鴨女町城ノ浜	4
第5 図	7	曾畑式土器				西之表市国上小浜貝塚	9
	8	塞ノ神式土器				中種子町輪之尾	
	9, 10	曾畑式土器				西之表市伊関柳原	10
	11	不明				西之表市伊関柳原	10
	12, 13, 14, 15	面縄東洞式				西之表市現和田ノ輪東方ノ平	14
	16	吉田式				西之表市安城川輪	
	17	塞ノ神式土器				西之表市国上久保田出土	
	18, 19, 20	塞ノ神式土器				西之表市現和田ノ輪東方ノ平	14
	21	塞ノ神式土器				中種子町輪之尾	
	22	塞ノ神式土器				西之表市住吉	
第6 図	23	轟式系土器				西之表市現和田ノ輪東方ノ平	14
	24	塞ノ神式土器				中種子町輪之尾	
	25, 26, 28	轟式系土器				西之表市現和田ノ輪東方ノ平	14
第7 図	27, 29	弥生式土器				西之表市現和泉原	
	30, 31, 32, 33 34, 35, 36, 37, 38	弥生式土器				西之表市現和泉原	
第8 図	39, 40, 41	磨製石斧				西之表市古田二本松	15
	42 ~ 45	磨製石鏃	46	扶杖耳飾		西之表市現和泉原	
	47, 48	石匙	49	小型石斧		西之表市古田二本松	15
第9 図	50	280g	№53	500g	№56	340g	
	51	470g	54	270g	57	210g	西之表市現和泉原
	52	370g	55	240g	58	250g	



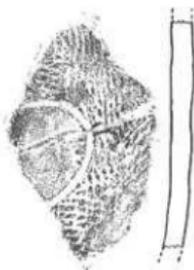
第4圖 周辺遺跡の出土遺物 (I) ($\frac{1}{2}$)



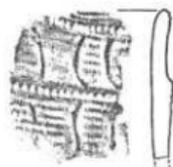
第5図 周辺遺跡の出土遺物(Ⅱ) ($\frac{1}{2}$)



21



22



23



24



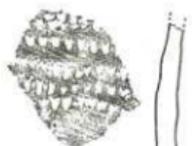
25



26



27



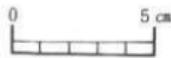
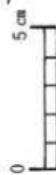
28



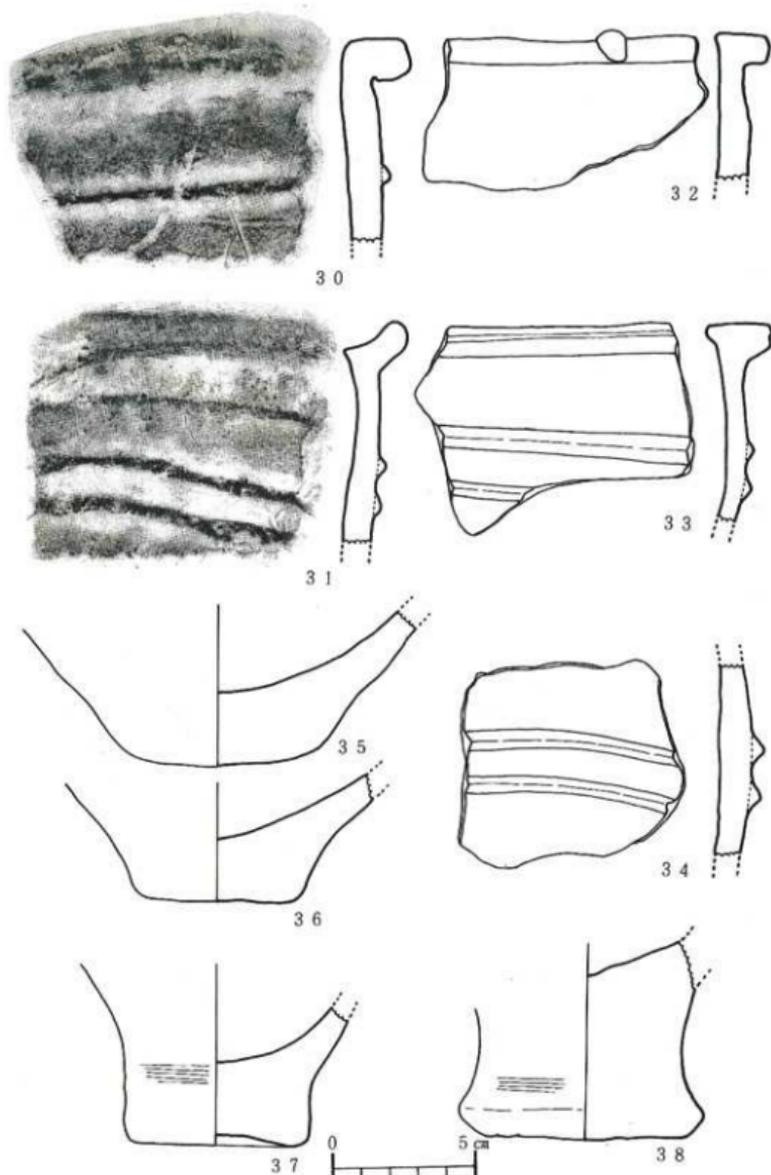
29



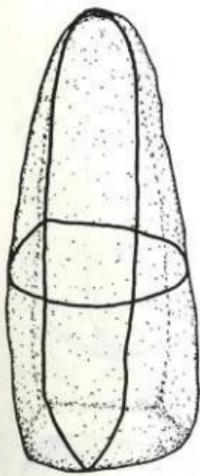
5



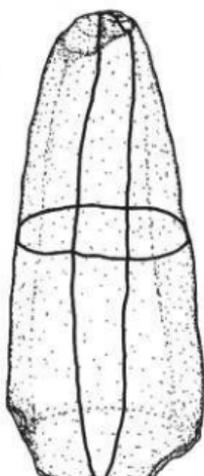
第6図 周辺遺跡の出土遺物(Ⅲ) (1/2)



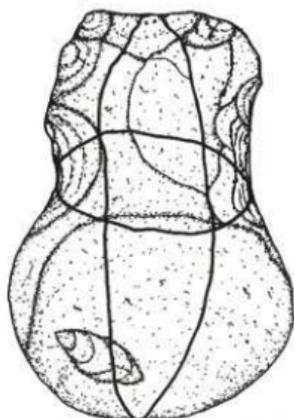
第7図 周辺遺跡の出土遺物 (N) $(\frac{1}{2})$



39



40



(1/2)



42



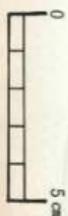
43



44



45



46



47

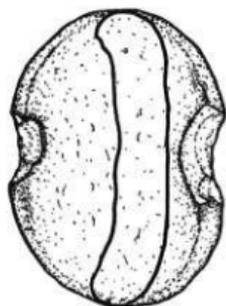


48

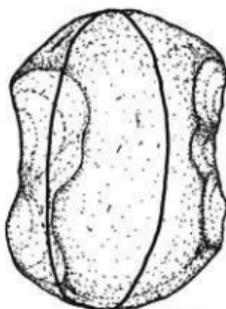


49

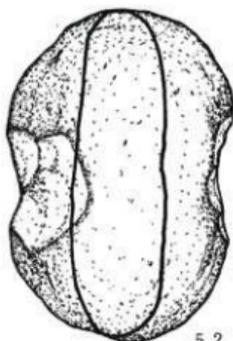
第8図 周辺遺跡の出土遺物 (V) (1/1.5)



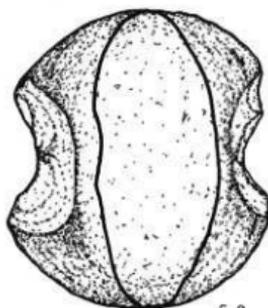
50



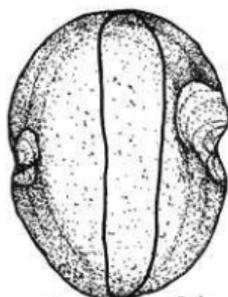
51



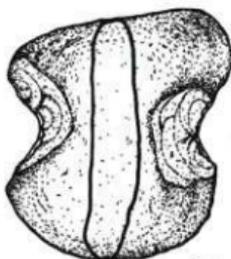
52



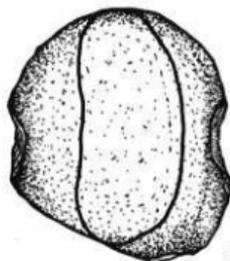
53



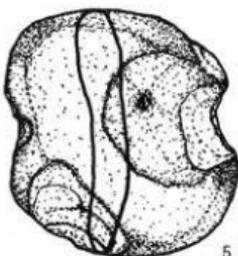
54



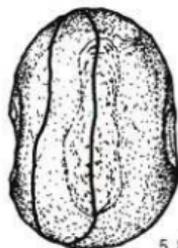
55



56



57



58

第9図 周辺遺跡の出土遺物 (Ⅵ) ($\frac{1}{2}$)

第2章 発掘調査の経過と概要

第1節 発掘調査の経過

県営補助整備事業（現和地区）に伴う文化財分布調査は、昭和47年9月、48年3月、50年4月と数次にわたり鹿児島県教育委員会文化課が実施し遺跡の確認をした。

昭和52年度事業地区は、昭和47年9月の分布調査において赤木、下刺峯、大四郎、内和の四ヶ所が散布地として確認したものが含まれた。

そこで、これらの文化財の取扱いについては、鹿児島県農地整備課、熊毛支庁と協議を重ねた結果、確認調査ののち発掘調査をおこなうこととなった。

調査は、国、県の補助事業として西之表市教育委員会が主体者となり昭和52年11月24日～12月26日までと昭和53年1月9日～25日まで実施した。その後の遺物の整理調査と報告書の作成は、県文化課調査員に依頼した。

発掘調査の組織

発掘調査主体者	西之表市教育委員会	
責任者	教育長	小原季丸
事務	総務課長	羽島友幸
担当	社会教育課長	富重 円
	係長	鎌田和好
	主事	皎島安豊
	"	西 義春
	"	奥村 学
発掘調査調査員	県文化課主事	新東晃一
	"	立神次郎
	"	青崎和憲（1月9日～1月14日）
発掘調査作業員	西之表市現和（下之町、上之町、浅川、田ノ脇、庄司浦）及び同市安納下郷の各地区	

なお、発掘調査にあたり、お世話になった次の方々 に記して謝意を表します。

鹿児島県教育庁文化課々長嶋元牧雄・同専門員本蔵久三・同埋蔵文化財職員

" 熊毛教育事務所

鹿児島県庁熊毛支庁土木課 西之表市耕地課長 久保季男

種子島実業高校小山田一志先生・種子島高校郷土研究会（顧問神園敏先生）

種子島を語る会、庄司ヶ浦地区岩下新八・花木計治及び現和・安納の校区長

今事業区の赤木遺跡・下剝峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡の確認調査と発掘調査は、昭52年11月24日から12月26日までと、昭53年1月9日から1月25日までの期間でおこなわれた。なお発掘調査の整理作業及び報告書の作成は、調査終了後、県文化課重富収蔵庫においておこなわれた。その間の経過は、調査日誌抄をもってかえたい。

調査日誌抄

- 11月24日(木)晴 必要機材搬送。西之表市教育委員会にて発掘調査の打ち合せ。後、今回発掘調査をおこなう(赤木・下剝峯・大四郎・内和遺跡)の視査。
- 11月25日(金)晴 発掘調査開始。作業員に作業上の注意と発掘調査の意義を伝達。発掘調査に入る。発掘調査は、四遺跡の確認調査から開始する。下剝峯、大四郎、内和、赤木遺跡の順でおこなうことにした。下剝峯遺跡の確認調査開始。巾2mのトレンチ設定、掘り下げ。6-D区Ⅱ層より弥生中期土片出土。
- 11月26日(土)雨 西之表市教育委員会にて調査上の打ち合せ。熊毛教育事務所へ挨拶。
- 11月27日(日)晴 確認調査続行。1~4区は耕作土の下層は黄褐色土(Ⅲ層)となり、遺構遺物は確認されなかったため、Ⅲ層の掘り下げをおこなう。その結果、4-B区付近に縄文式土器(貝殻文系)が検出される。
- 11月28日(月)晴 縄文式土器出土範囲確認のため、1~4-A~D区までトレンチ掘り下げ。1~4-A・B区が縄文式土器出土範囲。
- 11月29日(火)曇 大四郎遺跡の確認調査。中央トレンチ(2m×20m)と南北トレンチ(1区=2m×5m、2区=2m×10m、3・4区=2m×20m)を設定。
- 11月30日(水)曇 大四郎遺跡の平面調査。7区付近に柱穴遺構検出のため調査面積を拡張。表層より菅畑式土器が8片出土する。
- 12月1日(木)曇 内和遺跡の確認調査。中央トレンチ(2m×50m)と南北トレンチ4本設定。表層及びⅡ層掘り下げ。Ⅱ層中より土師器・須臾器出土。Ⅲ層に掘り込まれた柱穴が多数検出される。建物等の遺構が推定されるため確認調査を終了。今後の全面調査は、工事関係者と協議のうえおこなうこととする。
- 12月2日(金)晴 赤木遺跡の確認調査。トレンチ5本を設定(T1~T5)。T1、T2、T3は表層及びⅡ層からは遺物は出土せず。
- 12月3日(土)晴 確認調査の継続。T5においてⅣ層より塞ノ神式土器出土。T4で出土していないため小範囲と推定、T5を拡張し平面調査をおこなう。
- 12月4日(日)曇 T5の拡張区の調査。遺構検出・遺物検出作業。平面図・断面図の作成。出土遺物は塞ノ神式一個体分。
- 12月5日(月)曇 下剝峯遺跡の平面調査。砂軸キビ刈り取り中のため残部の確認調査ができないので、2~4-A~B区の平面調査をおこなう。
- 12月6日(火)晴 2~4-A区掘り下げ。Ⅲ層(赤ボッコ層)の掘り下げ後、Ⅳ層中より縄文式土器(貝殻文系)出土。

- 12月7日(水)曇 2~4-A区の遺構・遺物検出。IV層は遺物包含層である。出土した土器には貝殻腹縁で刺突した文様がみられる。細片であるが数量は多い。
- 12月8日(木)晴 2~4-B区のIV層の遺構・遺物検出。A区の南側壁に断面用のトレンチ設定、掘り下げ。2~4-A~B区(A地点)調査終了。
- 12月9日(金)晴 5-C・D区の平面調査。II層の遺物検出。II層より中期弥生式土器出土。
- 12月10日(土)曇 5-C・D・E区、6-F区の表土排除及びII層遺物・遺構検出作業。
- 12月11日(日)晴 確認調査再開。砂礫キビ刈が若干進んだため確認調査をおこなう。9-B・C・D・E・F・G区に2m×5mのトレンチ設定、II層面まで掘り下げ。9-D・E・F区のII層に遺物がみられる。
- 12月13日(火)曇 平面調査。6-D・E区のII層遺構・遺物検出。中期弥生式土器出土。
- 12月14日(水)曇 平面調査。7-D・E区、8-D区の表土排除及びII層掘り下げ。
- 12月15日(木)晴 確認調査。10-B・C・D・E区にトレンチ設定。10-D・E区のII層に若干遺物がみられる。
- 12月16日(金)晴 確認調査。11-B・C・D・E・F・G区、12-B・C・E区にトレンチ設定。II層及びIV層にはいずれも遺物の包含がみられない。
- 12月17日(土)晴 確認調査。11区と12区の確認調査の継続。ほとんど遺物はみられない。確認調査終了。7-D区の平面調査に移行。
- 12月18日(日)晴 平面調査。5・6・7・8-D・E区のII層上部の弥生(中期)式土器の検出を終了し、II層下部の検出にかかる。II層下部には、ミミズバレ状の突帯をもち条痕文の強い壺式様の土器が出土する。
- 12月19日(月)晴 5・6・7・8-D・E区のII層下部遺構・遺物検出作業。出土状態及び全体の写真撮影。土層断面図用掘り下げ。
- 12月20日(火)晴 9・10-D・E区のII層下部の遺構・遺物検出。遺構はほとんどみられないが、大形の河原石が比較的多くみられる。
- 12月21日(水)晴 7・8・9・10-D・E区のII層下部遺構検出続行。6・7-B区のIV層の掘り下げ。A地点(2~4-A・B区)の平板測量及び地形測量。
- 12月22日(木)晴 6・7-B区のIV層遺構・遺物検出。完形に近い土器と集石が一ヶ所検出される。7~9-E区のIV層確認調査。A地点の遺物とりあげ。
- 12月23日(金)曇 5-B区、6-A・B区、7-A区のIV層の遺構・遺物検出。
- 12月24日(土)曇 5-B区、6-A・B区、7-A区のIV層の遺構検出続行。全体清掃をおこない全体写真撮影、完形土器出土状態及び集石の実測。
- 12月25日(日)曇 6-A・B区、7-A・B区の実測。平板測量、写真撮影、遺物取り上げ。6・7・8・9-C区表土排除(1月再開のため)。
- 12月26日(月)晴 整理作業。12月の調査終了。西之表市教育委員会において調査上の打ち合せ。調査再開を昭和53年1月9日とする。

昭和53年度

- 1月9日(月)曇 西之表市教育委員会において発掘調査協議。文化課主事青崎和憲1月14日(土)まで調査に加入。
- 1月10日(火)晴 発掘調査再開。6・7-C区の表土排除及び遺構検出。残部Ⅱ層の調査。
- 1月11日(水)曇 8・9・10-C区の表土排出。7-C区遺物検出。7-C区には遺物は少ないが、8・9区に比較的多い。壱式土器に類似する。
- 1月12日(木)晴 7・8・9・10-C区のⅡ層遺構・遺物検出ほぼ終了。8・9-A区のⅢ層掘り下げ。Ⅳ層に縄文式土器の貝殻文系の土器がみられる。
- 1月13日(金)曇 8・9-A・B区のⅢ層掘り下げ終日
- 1月14日(土)曇 8・9-A・B区のⅣ層遺構・遺物検出。集石(No2)の検出。出土遺物は、B区列に集中するようである。
- 1月15日(日)晴 8・9-A・B区の遺構・遺物検出。5-A・B区のⅢ層排土作業。
- 1月17日(火)曇 5-A・B区のⅣ層遺構・遺物検出。A区列南壁に断面図用のミニトレンチ掘り下げ。6・7-A区の断面実測。
- 1月18日(水)曇 5・6・7・8-C・D・E区の中央畔取りはずし。畔中にも多量の遺物。
- 1月19日(木)晴 5・8・9-A・B区の全体清掃、写真撮影、遺構・遺物の実測。
- 1月20日(金)晴 5-A区、8・9-A区断面実測。地形測量。
- 1月21日(土)晴 遺跡周辺の調査。出土遺物の整理作業。
- 1月23日(月)晴 実測図の確認及び整理。実測図の補足。出土遺物の整理
- 1月24日(火)晴 出土遺物の整理。発掘機材等の整理を終了して発掘調査を完了する。
- 1月25日(水)晴 西之表市教育委員会において発掘調査終了の報告。

なお、整理作業と報告書作成は、県文化課重富収蔵庫において、1月26日～3月31日までの期間におこなった。

第2節 発掘調査の概要

1. 調査の方法と発掘調査の概要

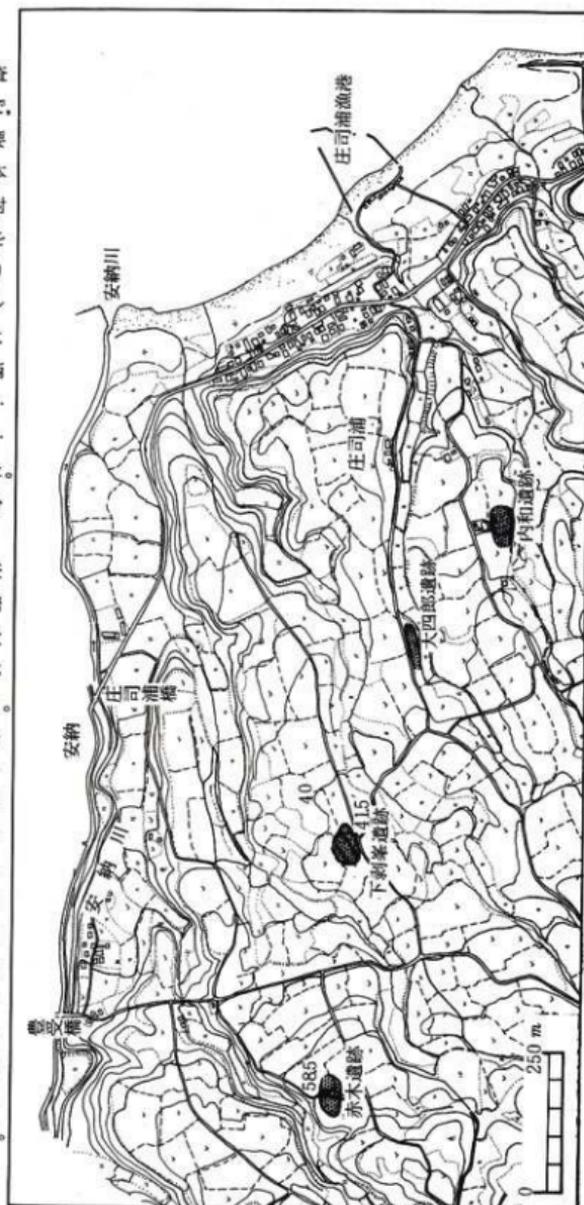
調査対象地が4ヶ所のため、調査対象面積のもっとも広い下剝峯遺跡に調査基地を設定した。そのため確認調査は、下剝峯・大四郎・内和・赤木遺跡の順で開始した。報告書においては、もっとも北西部に位置する赤木遺跡から順に記載することにする。

赤木遺跡

農道を狭んだ2枚の畑地に散布地がみられたため、畑地のほぼ中央部に巾2mのトレンチを5本設定した。その結果、トレンチ5(T-5)に縄文時代前期の塞ノ神式土器の出土がみられ、この区を中心に拡張して平面調査をおこなった。

下剝峯遺跡

本遺跡は、最も調査対象面積が広い遺跡で、発掘調査も長期間を要した。確認調査は、本調査を予定して調査対象地の東南隅に基点を置く10m×10mのグリッド内に巾2mのトレンチを設定することにした。グリッドは、西方向に1、2、3……北方向にA、B、C……と呼称することにした。下剝峯遺跡は、約半分が砂糖キビ畑のため、6区付近まで確認調査をおこない、後を砂糖キビ刈後として次の大四郎・内和・赤木遺跡の確認調査へ移行した。その後、再び確認調査をおこなった結果、5・6・7-C・D・E区付近に弥生式土器(中期)が、7・8・9・10-C・D区付近に貝殻燻文や沈線文の縄文式土器の出土が確認された。さらに、2～9-A・B区のパミス層(Ⅲ層)の下から吉田式土器や貝殻文系の縄文式土器が出土した。その後、確認調査から



第10図 遺跡の位置と周辺地形

継続して平面調査をおこなった。

大四郎遺跡

大四郎遺跡は、散布地が南向きの傾斜地で巾が約20mと狭いため中央部分に東西方向（北側の農道に平行して）に巾2mのトレンチを設定した。そして、それを基軸にして南北方向に10m間隔に巾2mのトレンチを設定した。7-B区付近に遺構（柱穴）が確認されたため、拡張してその部分の平面調査をおこなった。耕作のため、攪乱がみられ層序は旧状を残していない。耕作土の攪乱部分から曾畑式土器が出土している。

内和遺跡

散布地の中央部へ東西方向に2m×50mのトレンチを設定し、それを基軸に南北方向に巾2mのトレンチを伸ばした。その結果、耕作土層下の黒色土層中から土師器、須恵器の出土がみられ、黒色土の最下部から径20m程度の柱穴が多数検出された。確認調査の結果、農地整備課（熊毛支庁）及び関係者と協議のうえ設計変更をおこなう処置をした。

2 遺跡の層位

各遺跡の層序は、遺跡の調査概要で記述するが、赤木遺跡と下剝峯遺跡の層序を検討し、下記標準層を作成して各遺跡の層序の比較を試みた。その結果、Ⅲ層は、黄褐色を呈し軽石粒を含む厚さ50m以上の火山灰層で広範囲に堆積していることが判明した。そして、この層の上下から遺物が発見され、古代史解明上鍵層となることが確認された。すでに、この層は、アカホヤ層と呼ばれ（註1）、その上下から遺物が発見されることは気づかれていたが（註2）、発掘調査において実証した例は、貴重な資料といえよう。

註1. 松井 健（1966）大隅半島笠之原地の“アカホヤ”層の噴出年代 地球科学 87巻

註2. 盛岡尚孝（1971）“先史時代”中種子町郷土誌

表4 各遺跡の層位

	色 調	赤木遺跡	下剝峯遺跡	大四郎遺跡	内和遺跡
I	耕作土	○ (20~30cm)	○ (20cm)	○ (20cm)	○ (20cm)
II	a 黒色 砂質を含む	○ (10cm)	○ (10cm) 弥生中期土器	部分的に D黒色土を残す 無遺物層	* (15cm) 土師器 須恵器
	b 黒色 粘質を含む		○ (15cm) 染織文・凸帯文・沈線文		
III	a 褐色 軟質	○ (10~15cm)	○ (20cm)	× 削 平	○ (10cm)
	b 黄褐色 硬質 (粘質を含む)	○ (25~30cm)	○ (20cm)		○ (20cm)
	c 黄褐色 軽石	○ (15~20cm)	○ (15cm)		○ (15cm)
IV	灰褐色	○ (15~20cm)	○ (20cm)	× 削 平	○ (15cm)
	灰褐色 + 乳白色	○ (25~30cm)	吉田式土器 貝紋土器		
V	黒褐色粘質	○ (25~30cm)	○ (20cm)	× 削 平	○ (20cm)
VI	桃 白 色 (基盤)	○ ↓	○ ↓	○ ↓	○ ↓

第3章 赤木遺跡の調査

- 第1節 調査の概要
- 第2節 遺構・遺物
- 第3節 ま と め

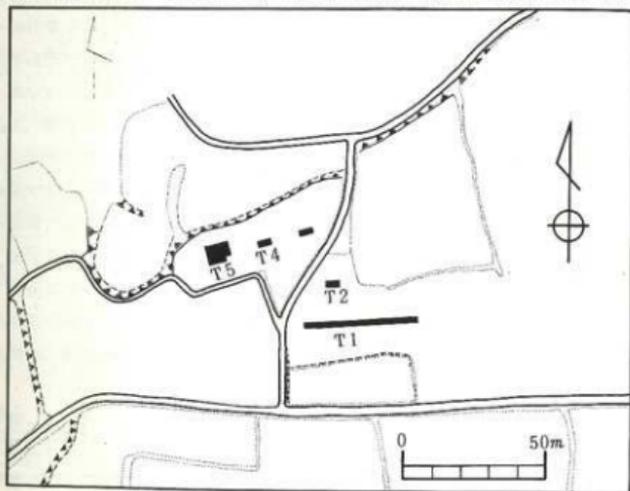
第1節 調査の概要

赤木遺跡は、安納川の支流の南側に隣接する標高約59mの台地上に位置している。地表面の傾斜は、北側に流れ北面している。

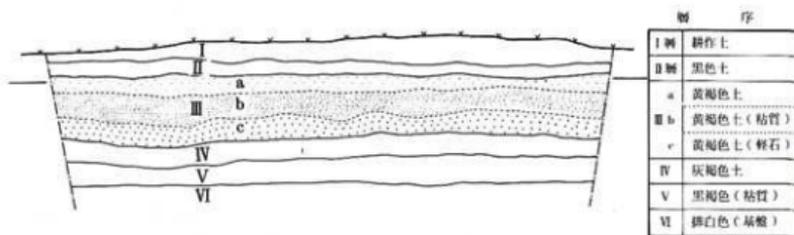
分布調査において遺物の散布がみられた地域は、農道を挟んだ両側の畑地で約2000m²にあたる。発掘調査は、農道より南東側の畑地と北西側の畑地に任意のトレンチを設定し、まず、確認調査から開始した。確認調査は、南東側の畑地に東西方向に2m×40m(T-1)のトレンチとその北側に平行して2m×5m(T-2)のトレンチを設定し掘り下げをおこなった。農道より北側の畑地は、ほぼ中央の略東西方向に2m×5mのトレンチを10m間隔に3本(T-3、T-4、T-5)設定し掘り下げをおこなった。

遺跡の層位

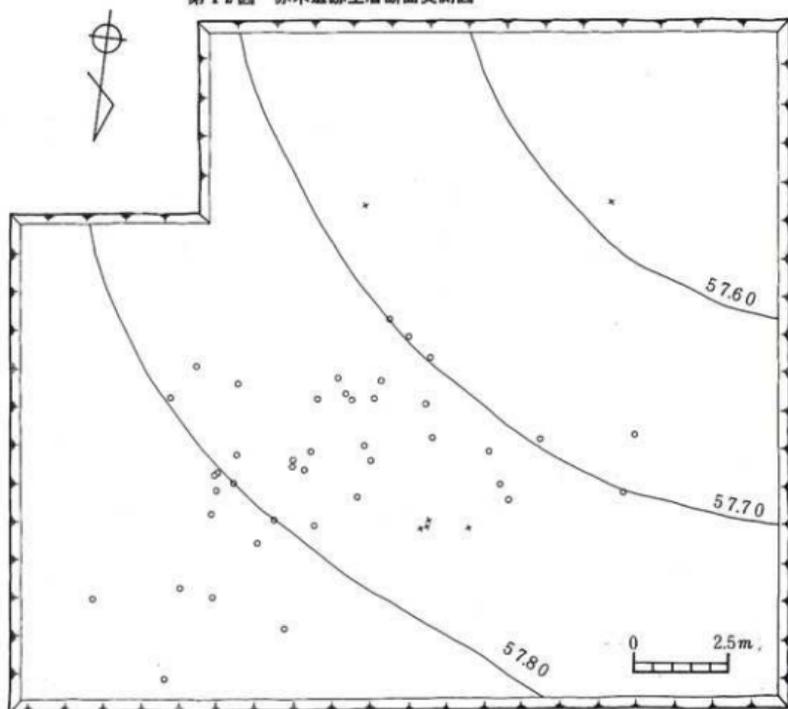
赤木遺跡の層位は、シラスに類似する桃白色のローム層まで6層に分離することが可能であった。特に、T-5においては整然とした層序がみられたが、他のトレンチにおいては、長年の耕作のため、Ⅱ層及びⅢ層の削平がみられた。T-5の層序について述べる次のようになる。Ⅰ層は、耕作土で20~30cmを計る。Ⅱ層は、黒色土で約10cmの厚さがみられるが遺物の包



第11図 赤木遺跡周辺地形とトレンチ配置図



第 12 図 赤木遺跡土層断面実測図



第 13 図 赤木遺跡 5 トレンチ平面実測図 (IV層)

序
上
土(粘質)
土(軽石)
上
(粘質)
(粘質)

含はなく無遺物層である。Ⅲ層は、全体に黄褐色のバミス層であるが粒子の性質上 a, b, c の3つに分離された。Ⅲ a 層は、茶褐色で軟質のバミス層であり、Ⅲ b 層は、黄褐色の硬質で粘質の強いバミス層である。Ⅲ c 層は、オレンジ色の 5mm~10mm 大の軽石堆積層である。Ⅳ層は、無遺物層である。Ⅳ層は、灰褐色を呈し 15cm~20cm の厚みを計る。本遺跡においては、Ⅳ層の上位から中位にかけて塞ノ神式土器の出土がみられた。Ⅴ層は、暗褐色のローム層であり約 30cm の厚みがみられる。Ⅴ層は、Ⅳ層と類似する粘質をもつが若干かたい。無遺物層である。Ⅵ層は、桃白色を呈し一見シラスに類似したものである。無遺物層である。

T-5 区の調査

確認調査の結果、T-5 トレンチのⅣ層に遺物の包含が認められた。とりあえず、T-5 を中心に東西方向 8m と南北方向 7m に拡張し、Ⅳ層の平面調査を実施した。Ⅳ層は、約 20cm 程度のほぼ均等な厚みを呈し、わずかに北方向に傾斜がみられる。出土遺物は、Ⅳ層の上部にみられ拡張区のほぼ中央に集中している。縄文式土器と自然礫が出土した以外は、掘り込みやピット等の遺構は確認されなかった。

第 2 節 遺物

縄文式土器は、41 点出土した。口縁部 3 点、底部 7 点で他は胴部破片である。整理の結果、これら 41 点は同一個体であり、接合によりその器形が判明し複元図を示した。

口縁部 「く」の字に外反する器形を呈する。口縁部は、波状を呈しているが出土した破片においては最高位と最低位は不明である。口縁端部には「ハ」の字状の刻目が施されている。口縁端部と頸部間には、1 条の凹線文がみられる。頸部には、3 条の凹線文が巡っている。器厚は、8mm 程度であり、口縁端部に向ってわずかに薄くなる。胎土にわずかに長石を含むが、器面の整形は良好で整っている。

胴部 器厚が 8mm 程度で、接合の結果はほぼ円筒形の器形を呈する。器面の施文は、頸部の凹線文の他に、胴部中央に 3 条の凹線文があり、底部上 3cm のところにも 3 条の凹線文帯が巡っている。凹線文の他に、巾約 1.5cm の撚糸網目文帯が縦位に施されている。撚糸文帯の間隔は、約 3cm 程度である。縦位の撚糸網目文の後に凹線文が施されている。胎土にわずかに長石がみられるが非常に良好なナデ整形がみられる。

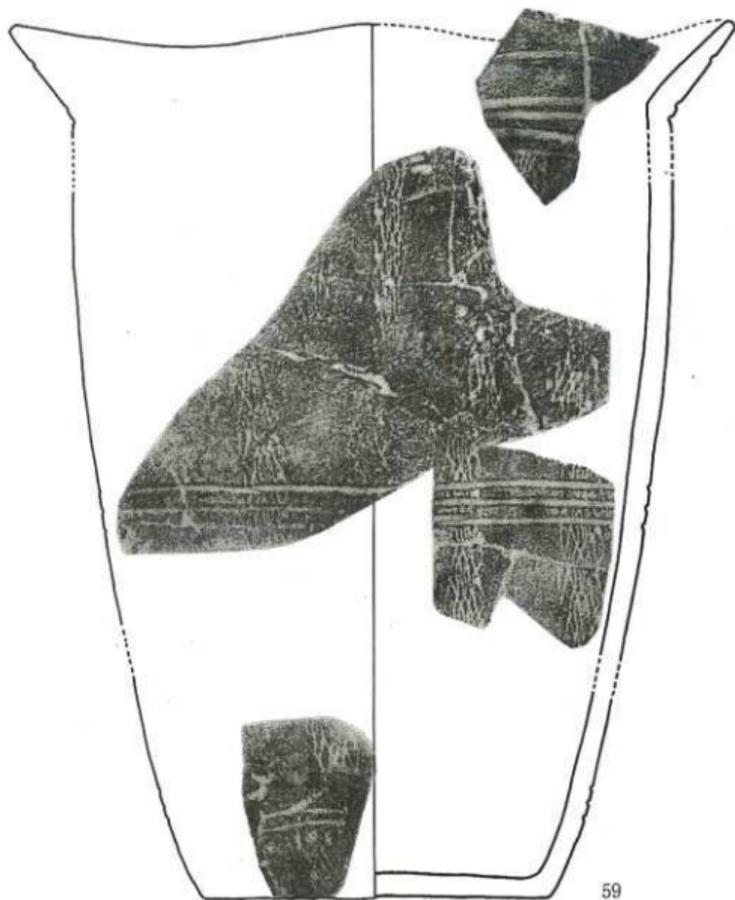
底部 底部中央は、わずかに上げ底を呈する。底部の厚みは 8mm 程度で、内面の整形は良好である。外面には、撚糸網目文が底部接着面まで施されている。

複元器形の推定高は、現存口縁で 31cm であるが、口縁部がもう少し伸びると考えられる。頸部径は 21cm、胴部中央径は 19.5cm、底部径 12cm である。

第 3 節 ま と め

赤木遺跡においては、Ⅳ層に縄文時代前期の塞ノ神 A a 式(註 1)に比定されるほぼ一個体分の土器の出土のみであった。しかし、次の二点に注目すべき成果が得られた。その一つは、





第14図 赤木遺跡出土遺物(1/2)

出土層位が赤ホヤ層(註2)下であり、本土と同一の層から出土している点である。その二は、これまで種子島において塞ノ神式土器は8遺跡に出土がみられたが(註3)、いずれも器壁の厚いもので、口縁部が連点文や刺突文で施文され、胴部には区画の中に燃糸文や網目文が施されたものや連点文帯が施されたものであった。以上のように、塞ノ神A式土器出土によって種子島における塞ノ神式文化は、本土と同一の様相を呈していることが確認された。

註1. 河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号1972年

註2. 松井 建「大隅半島笠之原台地の“アカホヤ”層の噴出年代地球科学87巻1966年

註3. 盛園尚孝 中種子町郷土誌1971年

第4章 下剥峯遺跡の調査

第1節 調査の概要

第2節 遺構・遺物

第3節 まとめ

第1節 調査の概要

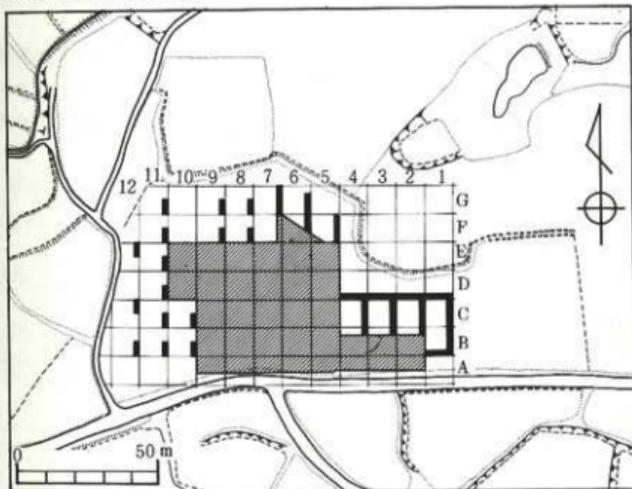
現和地区と安納地区の行政区分となり東海岸に注ぐ安納川と、同じく東海岸に流れる長さ約1.5 kmの小川に囲まれた標高42m程の丘陵地上に位置している。

遺跡周辺では、これまで耕作時においてたびたび弥生式土器破片が発見されたとのことであった。また、表面採集においても同様弥生式土器が採集され遺跡の位置は、このなだらかな丘陵の最も高い部分を中心に広がっていることが推定された。

発掘調査は、まず確認調査から開始したが耕作物（砂糖キビ）の関係で一部本調査と平行せざるを得ない部分もあった。丘陵のほぼ全域に遺跡の広がりが推定されたため、南東隅を基点に10m×10m単位のグリッドを丘陵全体に設置した。そして、基点から西方向に1, 2, …12北方向にA, B ……G区の記号で呼称した。

①遺跡の層位

下剥峯遺跡においては、弥生時代と縄文時代の遺物を包含する3文化層が存在した。本遺跡の層位区分は、次のようになる。



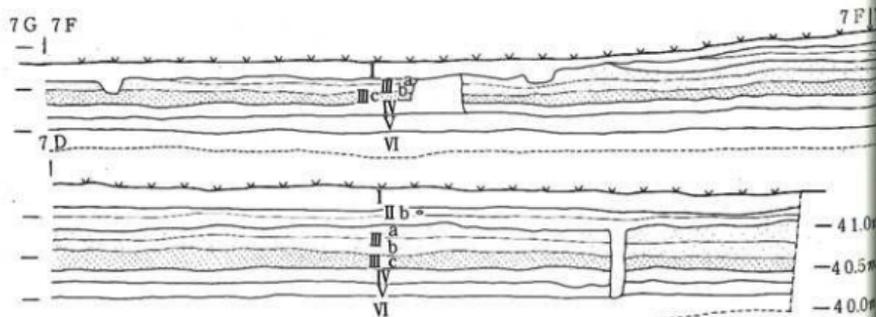
第15図 下剥峯遺跡周辺地形とグリッド配置図

の二は、
器壁の
が施さ
よって

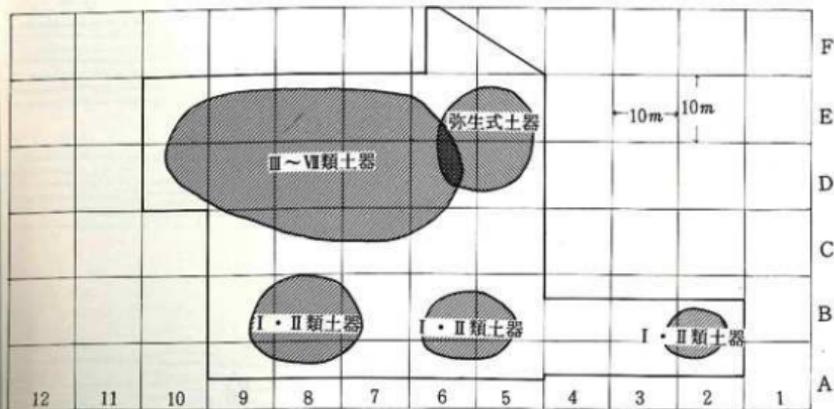
966年

- I層：耕作土である。色調は、灰褐色を呈し、約20cm程度の厚さがみられる。
- II層：黒褐色火山灰層である。2-A B区～9-A B区においては、耕作のためII層は削平されている。II層は、5-C D E区から10-C D E区にかけてみられるが、a、bに分層される。
- a層：色調は、黒色を呈し若干砂質を含む。層の厚みは、約10cm程度みられるが、相当耕作によって削平されたと考えられる。弥生式土器及び石器が出土する。
- b層：色調は、黒色を呈し若干粘質を含む。層の厚みは、15cm程度みられる。出土遺物には、貝殻条痕文系、突帯文系、連点文系、沈線文系及び燃糸文系の縄文式土器が出土する。
- III層：全体に黄褐色を呈する厚さ約35cmの火山灰層である。通称「赤ボッコ」と呼ばれるパミス層である。砂質の相違により、a、b、cの3層に分離されるが、本遺跡においてはa、b層の区別は困難な部分のみみられ、A B区付近は、III a層まで削平されている。
- a層：褐色を呈する軟質の火山灰層である。厚さは、残存部分で10cm程度である。
- b層：黄褐色を呈し粘質の強い硬質の火山灰層である。厚さは、20cm程度みられる。
- c層：オレンジ色の5mm～10mm程度の軽石の堆積層である。
- IV層：全体に灰褐色を呈するが、上部が灰褐色を呈し下部にいくにしたがって乳白色に近い色になる部分もみられる。厚さは、約20cm前後である。この層は、2-A B区～9-A B区において吉田系や貝殻文系の縄文式土器を包含する。
- V層：黒褐色を呈する粘質火山灰層で20cm前後の厚みがみられる。本層は、無遺物層である。
- VI層：桃白色の色調を呈する火山灰層で若干礫を含むところもある。層は、相当に深くその厚みは判明しない。調査においては、基盤層として取り扱った。

以上のような層位がみられたが、本遺跡は面積が広いため層が欠けたり、同層でも遺物を含まない部分もみられた。2-A B区～9-A B区においては、II (a、b)層及びIII a層が耕作のためほとんど削平されていた。また、C D E区列においては、IV層は存在するが遺物は出土していない。



第16図 土層断面図(6・7・8-C・D区)



第17図 遺物類別出土状態

② II a層の調査

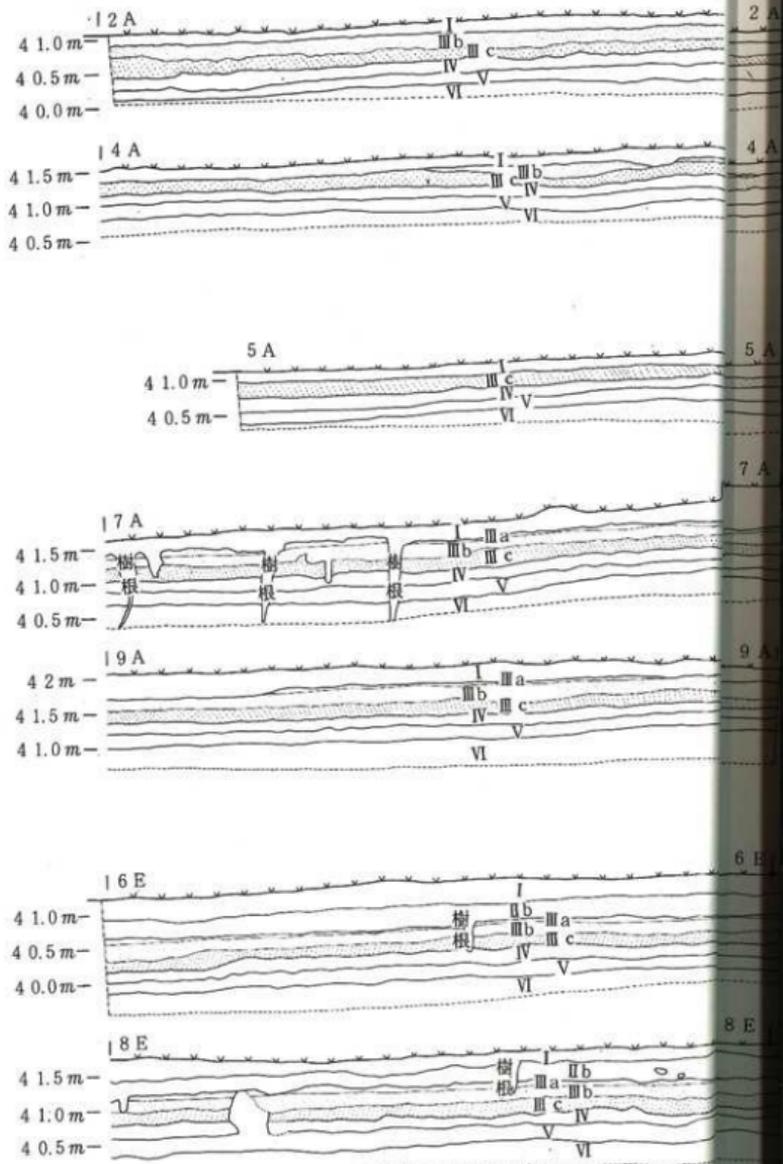
5・6・7-D E区のII a層に、弥生式土器が集中して出土している。弥生式土器が集中する北東側に畦が存在したためにこの周辺は削平を免れたものであり、本来はもう少し広範囲であることが考えられる。平面調査の結果、遺構は検出されなかったが、弥生式土器（壺形土器306~317・甕形土器318~378）と石器（磨製石鏃374・375・打製石斧377・378）が出土した。

③ II b層の調査

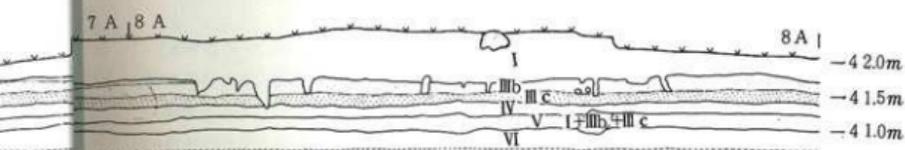
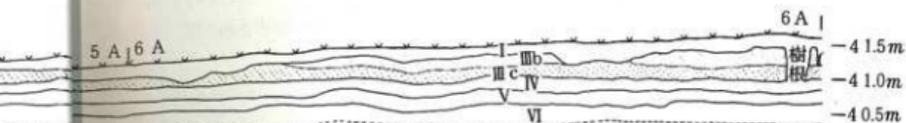
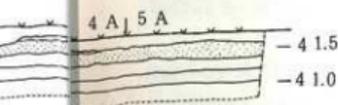
6~10-C~E区にかけては、II b層が残存している。他の地域は、耕作のため削平されている。II b層は、黒色を呈し若干粘質で礫片を多く含んでいるところもある。出土遺物は、そのほとんどが散乱した状態で出土しており、中に40~50cm大の自然円礫も含まれている。平面調査の結果、遺構は検出されなかった。出土遺物には、縄文式土器（条痕文系、連点文及び沈線文系、凸帯文系、縋糸文系）と石器（磨製石斧・打製石斧・蔽石）が出土した。 7E | 7D



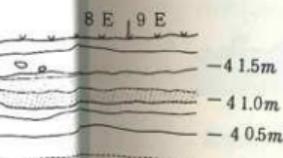
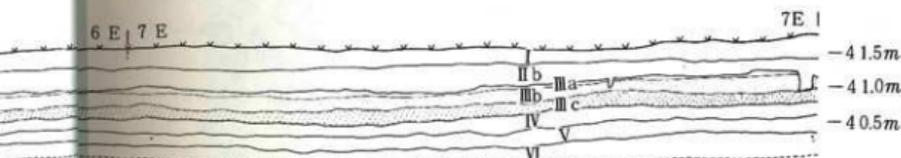
- I 層：耕作土層
- II a 層：黒色土層（砂質を含む）
- II b 層：黒色土層（粘質を含む）
- III a 層：褐色土層（軟質）
- III b 層：黄褐色土層（硬質で粘質を含む）
- III c 層：黄褐色土層（軽石）
- IV 層：灰褐色土層（灰褐色+乳白色）
- V 層：黒褐色粘質土層
- VI 層：桃白色土層



第 18 圖 下刺峯遺跡地層断面圖



- I 層: 耕作土層
- IIa 層: 黑色土層 (砂質を含む)
- IIb 層: 黑色土層 (粘質を含む)
- IIIa 層: 褐色土層 (軟質)
- IIIb 層: 黄褐色土層 (硬質で粘質を含む)
- IIIc 層: 黄褐色土層 (軽石)
- IV 層: 灰褐色土層 (灰褐色+乳白色)
- V 層: 黒褐色粘質土層
- VI 層: 桃白色土層



④ IV層の調査

確認調査の結果、III層（赤ボッコ層）下に位置するIV層に貝殻文を主体とする縄文式土器文化が存在することが判明した。各グリッドの南東隅に2m×5mのトレンチを設定し、調査した結果、2-A B区～9-A B区をこれらの遺物が包含していることが確認され、平面調査をおこなった。

遺物包含層にあたるIV層は、その色調が灰褐色を呈しているが、部分的には灰褐色から乳白色に漸移しているところもみられる。IV層面は、西南方向から東北方向へわずかに傾斜がみられ9-A区付近が最も高い。縄文式土器は、まばらな状態で調査区全体にみられたが、その中で3ヶ所に農密な分布がみられた。土器以外に伴う遺物はほとんどみられず、ただ、242の石器が1点出土したにすぎない。遺構は、7-B区と8-A区に集石2ヶ所が検出された。

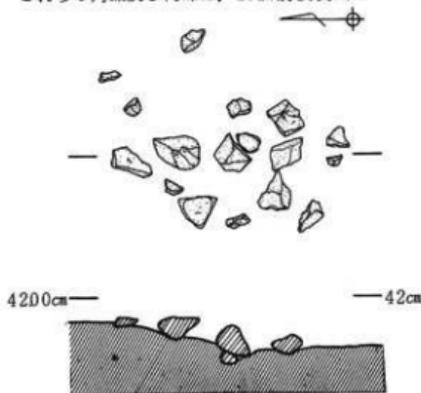
第2節 遺構・遺物

1 遺構

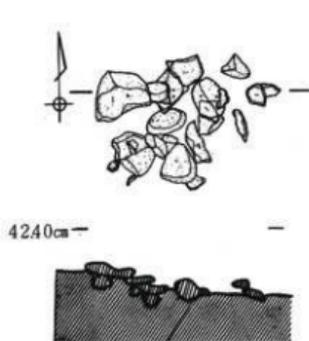
7-B区と8-A区付近に集石2ヶ所が検出された。出土層は、IV層の下部にあたり、IV層出土の貝殻文系土器と同時期と考えられる。これまでの他遺跡発見の集石と比較すると若干「バラツキ」がみられるが、同層中には、他の自然礫等はほとんどみられないところから人為的な様相が考えられるものである。

集石Ⅰ（第19図）

7-B区より検出されたものである。長径90cm×短径70cmを計り平面的に散在している。断面からは、あまり高低差はみられない。10cm～20cm前後の安山岩質の自然礫を使用している。これらの角礫及び円礫は、20個前後使用しているが「バラツキ」がみられる。集石の周辺を



第19図 集石Ⅰ実測図



第20図 集石Ⅱ実測図

耐性に観察した結果、土器の出土はみられたが焼痕跡、炭化物、灰の残存、腐蝕物の付着などは確認されなかった。自然礫を一個所に集めた、いわゆる集石を形成しているが、性格は不明。

集石Ⅱ（第20図）

8-A区より検出されたものである。試掘トレンチの掘り下げの段階でIV層下部より一部が確認され、本調査の段階で集石遺構として検出された。集石は、約75cm×60cmのほぼ円形を呈したまとまりのみられるものである。石材は、集石Ⅰ同様の安山岩質の自然礫である。

2 遺物

本遺跡の出土遺物は、土器と石器の種類に分かれた。Ⅱa層から弥生式土器が出土し、Ⅱb層とIV層からは縄文式土器が出土した。遺物は、下層のIV層から順に記載したい。

①Ⅳ層出土の遺物

IV層からは、貝殻文を主体とする縄文式土器の出土以外は石器が1個出土している。

土器の分布

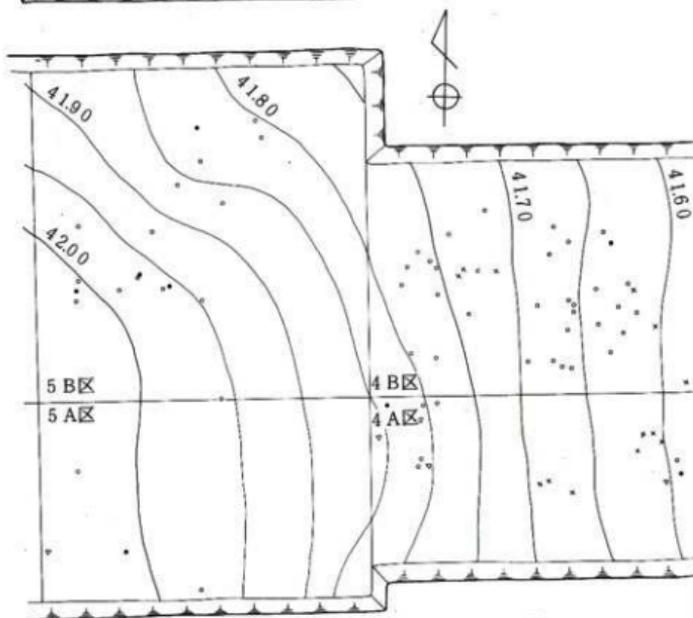
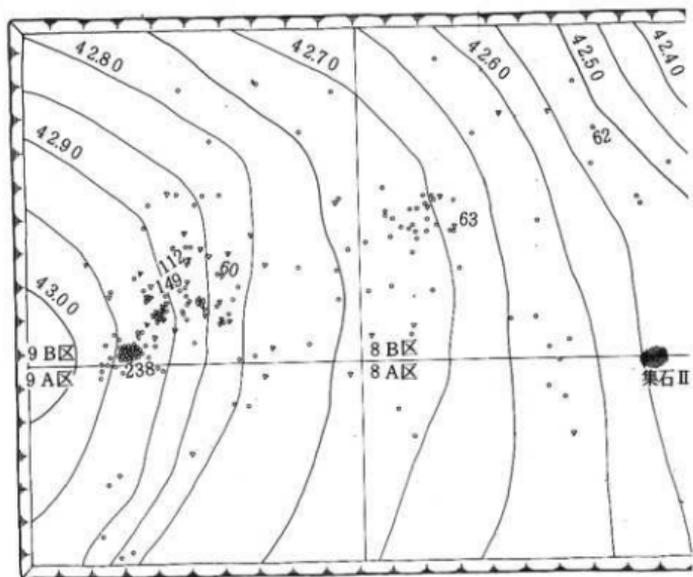
IV層出土の土器は、調査区全体にまばらな状態で出土しているが、その中で2ヶ所に集中して出土している。第22図は、これらの土器の出土位置図である。

その中で、6-B区にはほぼ完形に近い状態で土器の出土がみられた。この土器は、114（第30図）である。114は、口縁部下の外面に突起を持ち、器面に貝殻腹縁によって棘突線を施したものである。この土器は、胎土・焼成・施文等に個性がみられ、他のタイプのものと比較すると区別が容易であった。ところで、この接合された114土器片の出土範囲は、第22図のようになる。その結果、口縁部から底部まで一括して出土した6-B区を中心に最大で11mの5-B区や7-A区など広範囲に分布がみられた。その出土範囲は、前記したように直径約20mにあたる。これらの土器は、厚さ約20cmのIV層内に包含されているものであるが、遺物が破壊されてからⅢ層（赤ボッコ）が堆積されるまでの時期に、相当な遺物あるいは層の流動があったことを示している。

①土器

IV層からは、2-A B区から9-A B区にかけて貝殻文を主体とする縄文式土器が出土している。整理の結果、これらの貝殻文土器は、下記の特徴をもってⅠ、Ⅱの2つに分類し、さらにⅡをa、b、cの3つに分類した。

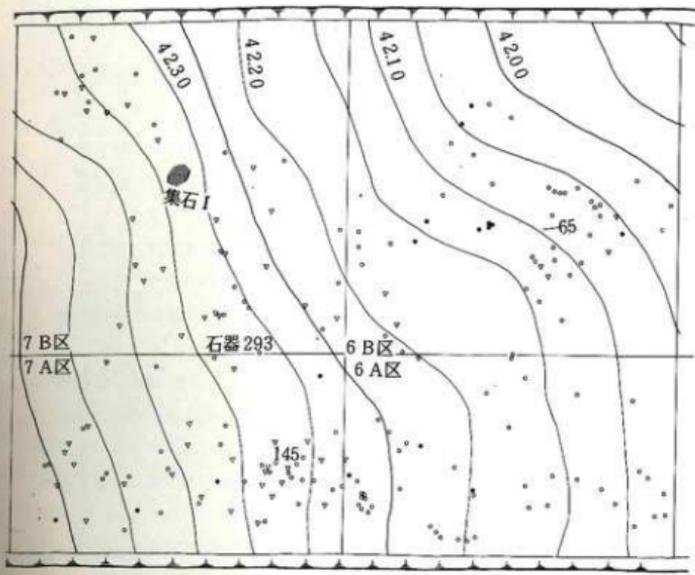
Ⅰ類土器：口縁部は外反し、口唇部は平坦でそのうえにいいいな連続する刻目を施す。外面の施文は、口唇部下で横位に貝殻腹縁を棘突して一周する棘突線を巡らしている。この棘突線は、2条施されている。その下方には、貝殻押し引き文を施す。



第 21 图 2~9-A~B区 N层平面图

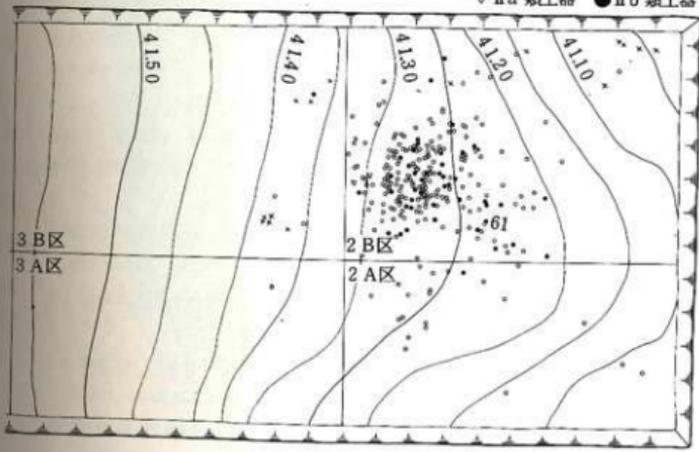
4240

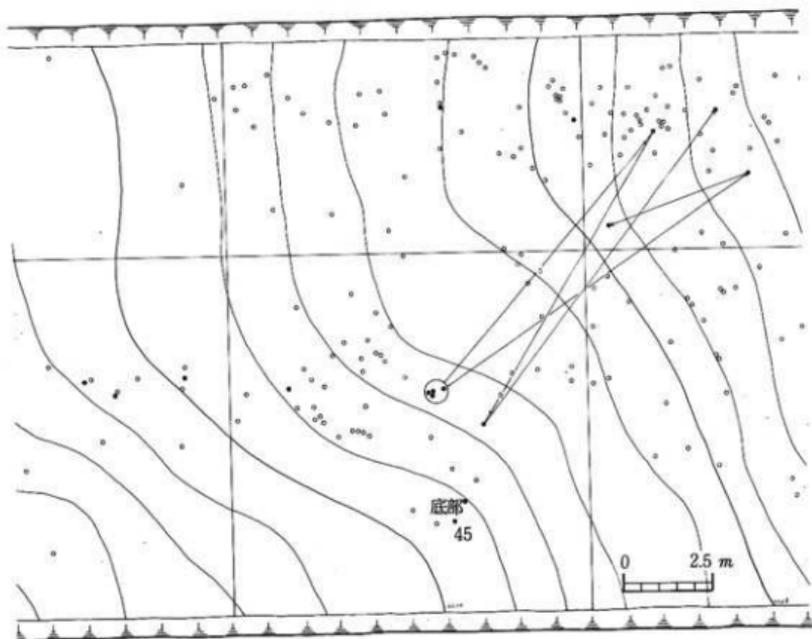
集石II



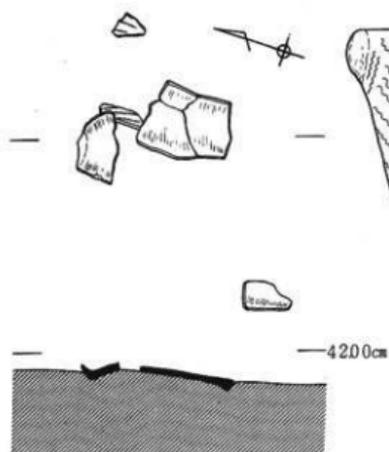
4150

×石片 ○IIc類土器
 ▽IIa類土器 ●IIb類土器

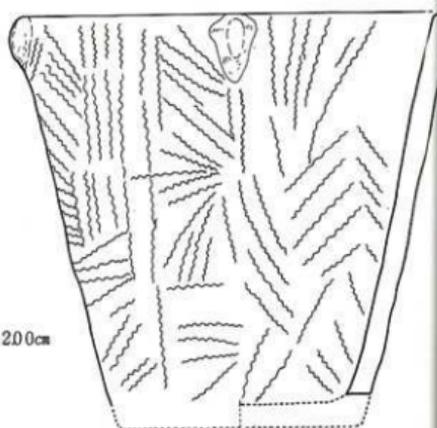




第22圖 114 土器出土平面圖 (→印に接合)



第23圖 114 土器出土狀態



第24圖 114 土器復原圖

Ⅱ類土器：器形は、口縁部に向って若干内彎するか直口し、口唇部平坦面は内傾する傾向がみられる。中には、口縁部外面に縦位の突起をもつものや、頸部に横位の突起をもつもの、胴部に縦位または横位の突起をもつものが含まれる。施文のうえにおいて次のように類別される。

Ⅱ a類：器面に、クシがき文を羽状あるいは鋸歯文状に施すもの

Ⅱ b類：貝殻腹縁で不規則に、あるいは鋸歯文状に連続して棘突するもので、貝殻腹縁の圧痕が半載竹管文状に表現されるもの

Ⅱ c類：貝殻腹縁で不規則に、あるいは鋸歯文状に連続して棘突するもので、貝殻腹縁の圧痕が方形状に表現されるもの

以上のように類別し、個々の土器について記述したい。

Ⅰ類土器（60・61）

Ⅰ類に属するものは、60と61の2点である。60はC-74区、61はA-26区出土。

60は、口縁部である。器形は、口縁部が外反し、口唇部は平坦でその上にいねいな連続する刻目を施す。器外面の施文は、口唇部下で口縁に沿って横位に貝殻腹縁を棘突して棘突線を巡らしている。その下の施文は、貝殻腹縁を縦位に置き押し引きする手法の施文がみられる。内面の整形は、非常にいねいなへら磨きがみられ光沢をもつ。色調は、赤褐色を呈する。胎土には、微粒の石英・長石を含むが、焼成は良好である。

61は、底部付近の破片である。器面は、保存が悪く剥脱している部分がある。器面の施文には、

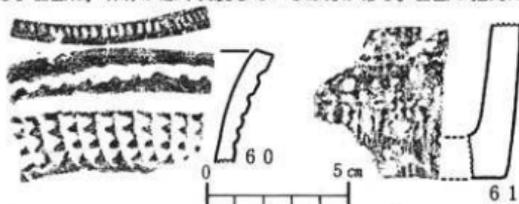
貝殻腹縁を縦位にして押し引き手法がみられる。

底部外面には、縦位の沈線文が施されている。

底部内面及び底ともいねいなへら磨きの手法がみられる。

色調は、黄赤褐色で、焼成は良好である。

胎土には、石英・長石の微粒を含む。



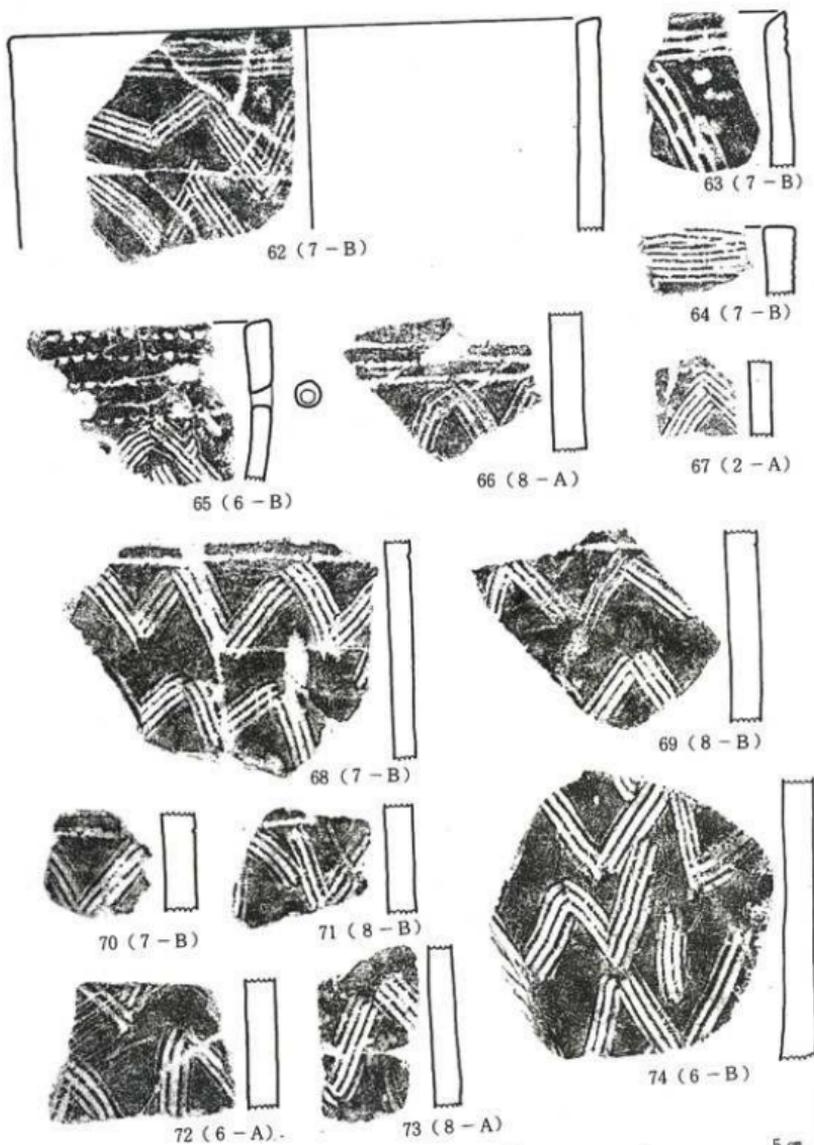
第25図 Ⅰ類土器 (1/2)

Ⅱ類土器（第25図～第32図）

Ⅱ類土器は、前記したように器形は類似しながら施文においてa, b, cの3つに類別された。Ⅱ a類土器から順に記述したい。

Ⅱ a類土器（62～112）

器面に、4条あるいは5条からなるクシ目状の施文具をもって鋸歯文を意図した文様を主体として画するものである。62～71は口縁部、72～106は胴部、107～112は底部破片である。



第26圖 II a 類土器 (1)($\frac{1}{2}$)

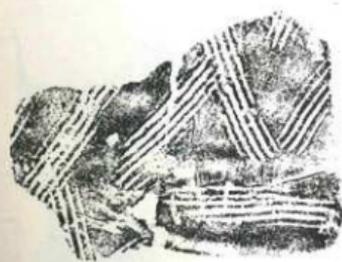
-B)

B)

A)



5 cm



75 (9-B)



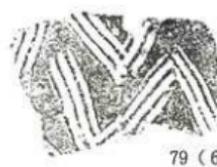
77 (8-B)



76 (8-B)



78 (6-A)



79 (6-B)



80 (9-B)



81 (9-B)



82 (9-B)



83 (9-B)



84 (9-B)



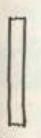
85 (5-A)



86 (9-B)



87 (7-B)



88 (9-B)



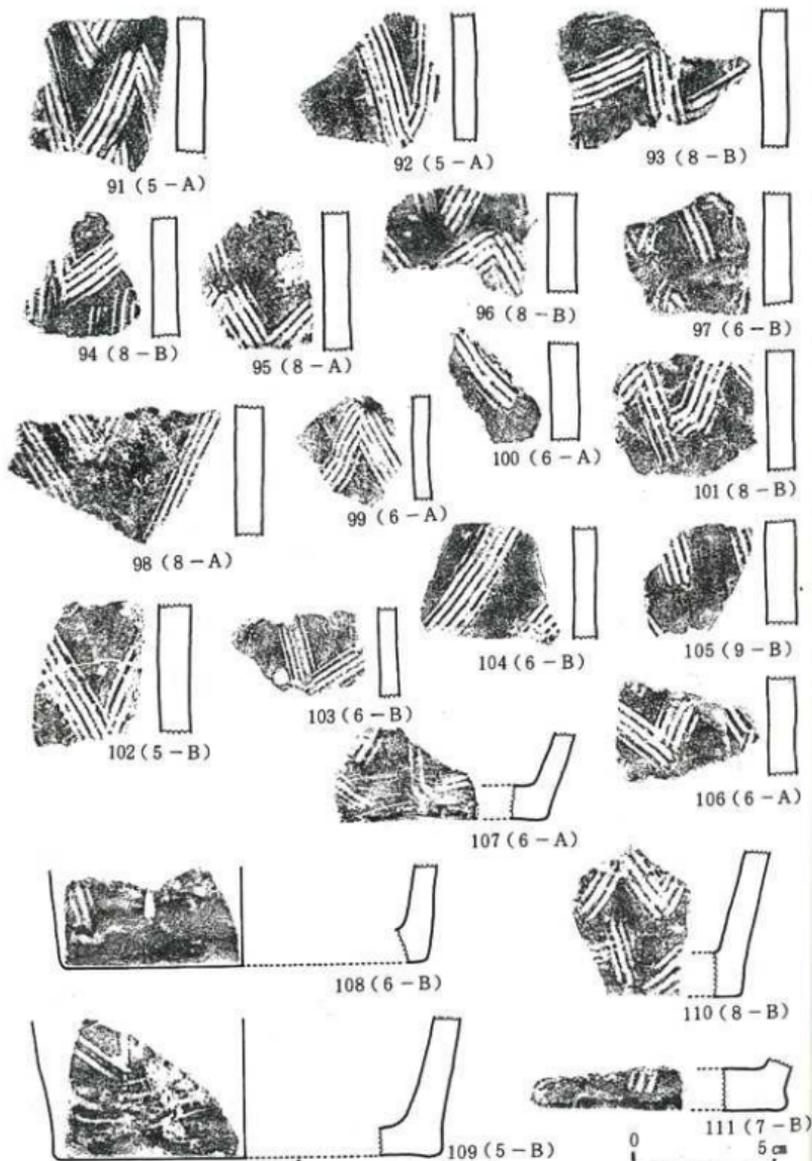
89 (7-B)



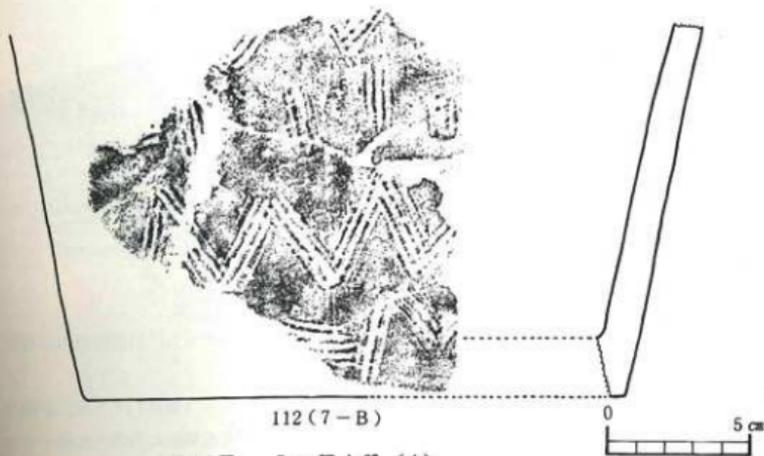
90 (7-B)



第27圖 Ⅱa類土器 (2) (1/2)



第28圖 II * 類土器 (3) ($\frac{1}{2}$)



第29図 II a 類土器 (4)

【口縁部 (62~71)】

器形は、わずかながら内弯し口縁部平坦面は内傾する傾向がみられる。器面は、内外とも光沢をもつへら磨き状の整形が特徴である。胎土には、石英・長石の細粒が観察される。色調は、赤褐色を呈する。文様には、次の2つの施文の仕方がみられた。

- ① 62~64 口縁部に沿って平行したクシがき沈線が4条~5条の沈線文を巡らすもの。その下方から胴部に4条から5条のクシがき沈線で鋸歯文を構成している。
- ② 65~71 口縁部に沿って貝殻腹縁で横位に平行して棘突した棘突線を巡らすもの。その下方から胴部には、①と同様の手法で鋸歯文を構成している。

なお、65には、口縁部近くに径9mm程度の円孔が施されている。この円孔は、外面からいねいに穿孔されている。

【胴部 (72~106)】

器外面に、クシがき沈線で鋸歯文を意図した文様を描くものである。クシがき沈線は、4条と5条のものがみられる。胴部断面は、直線的でほとんどカーブをもたない。器厚は、薄いもので5mm程度のもの(87・99)がみられるが、ほとんどが1cm内外のものである。器内外の整形は、口縁部と同様でいねいなへら磨き仕上げで光沢がみられる。胎土には、石英・長石粒が含まれ、中には大粒のものも観察される。色調は、赤褐色から黄褐色のものがみられる。鋸歯文には、定規で画するような規則的な精巧さはなく若干あらいタッチで描かれている。90のように、すでに鋸歯文の構図が失われているものもみられる。77には、胴部上方に 1.2×1.5 cm程度のわずかに楕円の円孔がみられる。円孔は、外方から穿孔され、器厚からみて口縁部付近と考えられる。

75と76には、突起がみられる。突起は、巾2.5cm程度、高さ約1cmで現存長7cm程度のもの

である。突起の頂部にも、平行なクシがき沈線文が施されている。

【底部（107～112）】

底部は、平底でほとんど平坦である。底部径は、約13～14cm程度のものから19cm程度の大型のものもみられる。底部で若干しまり、そして直線的に拡張して胴部に至るもの（107・109～111）と底部から直線的に拡張して胴部に至る（108・112）いわゆる“バケツ型”を呈する器形である。底部側面の文様は、胴部と同様クシがきの鋸歯文が下端まで施されている。胎土には、石英・長石粒が観察される。色調は、赤褐色から黄褐色のものがある。

Ⅱb類土器（113～144）

貝殻腹縁で不規則に、あるいは鋸歯文状に連続して棘突するもののうち、貝殻腹縁の圧痕が半截竹管状に表現されたものである。

113は、Ⅱb類を代表する唯一の完形品である。口縁径19cm、高さ（現存）16.7cm、底径現存）16.5cmを計り、器厚は0.9cm程度である。底部から口縁部に直線的に外方に拡張した土器で、いわゆるバケツ型を呈するものである。口唇部は、平坦でわずかに内傾する。口縁部外側には、四方に突起を貼付している。器外面には、平行する貝殻棘突線が施されているが規則的ではない。なお、器面は、保存が悪く剥脱がめだつ。内面は、へら磨き状の整形がみられるが若干あらい。突起は、縦位のもので縦2.5cm横1.5cm程度の楕円に近いものである。突起貼付のため、口縁部径は、隅丸形に近い。色調は、黄褐色であるが部分的には暗褐色である。

【口縁部（113～121）】

口縁部は、わずかに内湾しながら口唇部で若干肥厚している。そして、口唇部は、平坦面をつくるが、わずかに外傾するもの（115・120・121）と水平なもの（116・117・119）と内傾するもの（113・118）とがある。このことは、土器破片が細片のため一部分の計測しかできず口唇面の傾きが一定しないことも考えられ、基本的には、113のように内傾するものが主体と考えられる。器厚は、5mm程度の薄手のものが多い。

口縁部の文様は、口唇部に沿って貝殻腹縁を横位に棘突した棘突線を巡らしている。このような棘突線を3条程度巡らし、口縁文様帯としている。この施文は、Ⅱa類の㊸にも類似するものである。口縁部内外面ともへら磨き状の整形がみられる。胎土には、石英・長石の細粒が観察される。色調は、黄褐色から灰褐色の若干暗い色調を呈している。

【胴部（122～139）】

胴部文様は、破片が細片のため貝殻棘突線の直線しかみられないものもあるが、124や134のように棘突線を4本程度組み合わせ鋸歯文を構成しているものと考えられる。

器厚は、0.5～1.0cm程度のものでみられるが、薄手のものが多い。外面は、へら磨き状のていねいな整形がみられるが、内面は、へら磨き仕上げがみられる。胎土には、石英・長石の細粒が若干観察される。色調は、口縁部同様黄褐色から灰褐色の若干暗い色調を呈している。

大型
09
呈す
胎

痕が
家現
た土
部外
規則
れる
起貼

面を
と内
しか
のが

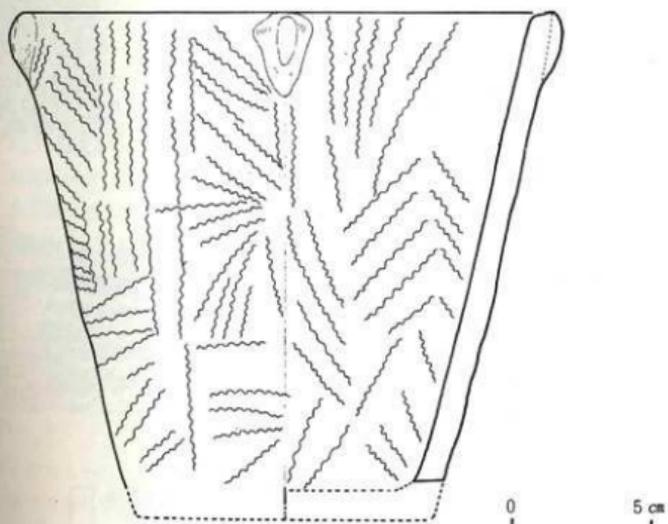
このよ
以する
細粒が

134

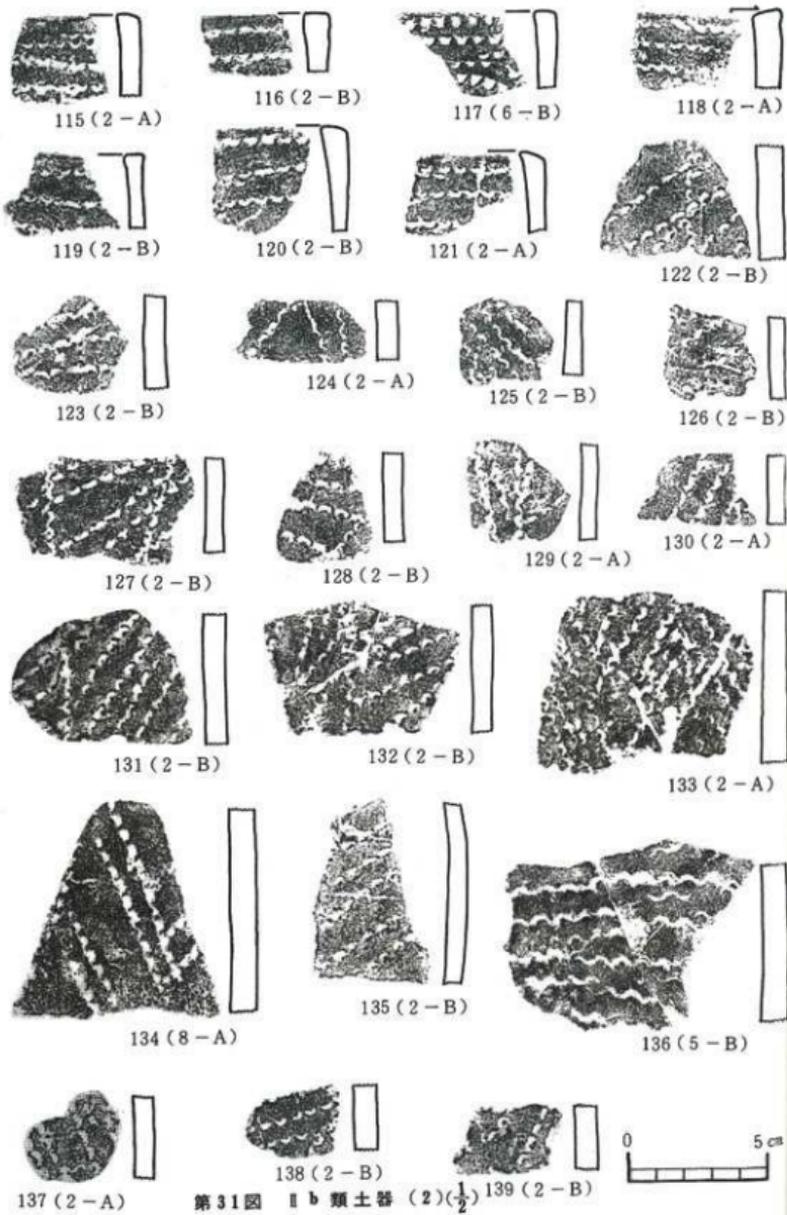
磨き状
・長石
ている。



113 拓影図



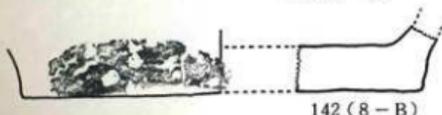
第30図 II b 類土器 (1) 114 実測・復元図



第31圖 II b 類土器 (2)($\frac{1}{2}$)



140 (7-A)



142 (8-B)

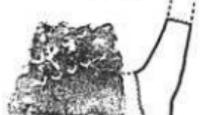


144 (5-B)

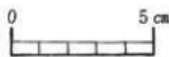
第32図 II b 類土器 (3) (1/2)



141 (2-B)



143 (2-B)



【底部 (140~144)】

底部は、平底で平坦である。底部径は、9 cm~14 cm程度のものみられる。底部の厚みは、1.2~1.7 cmを計る。器形は、底部下端でしまり、若干外方へ拡張しながら胴部に至る。底部側面には、貝殻腹縁の斜めの棘突線が下端まで施されている。また、144のようにクシがき沈線文が施されたものもみられる。

II c 類土器 (145~242)

貝殻腹縁で不規則にあるいは鋸歯文状に連続して棘突するものうち、貝殻腹縁の圧痕が方形形状に表現されるものである。

【口縁部 (145・146・149~170)】

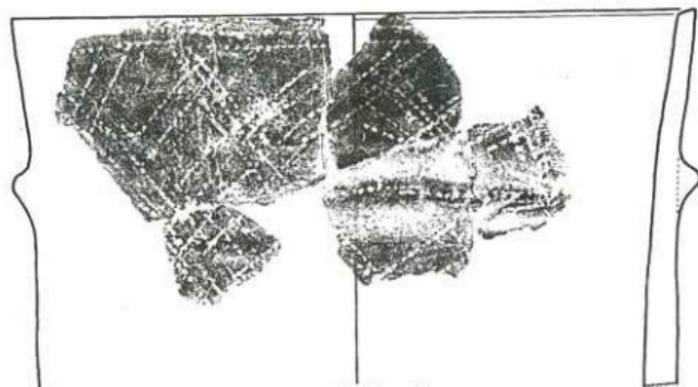
器形は、口縁部が内弯しながら口縁端部に平坦面を作るものである。しかし、145のように横位の突起が着く頸部付近から若干外反するものもみられる。口縁端部の平坦面は、内傾するものがほとんどであるが外傾するもの (149・153・154) もみられる。これは、II b 類と同様、部分的に生じた傾きとも考えられる。

貝殻棘突線には、比較的細い棘突文 (145・146) がみられるがほとんどが太い棘突文である。文様には、口縁部に3条 (145・157) と4条 (153・161) の貝殻棘突線を巡らした口縁文様帯を作るものと、口縁部から縦位の鋸歯文を作るもの (149・158) とがある。

145は、II c 類の中では若干異質な器形・施文がみられ胴部文様も格子目を現わす棘突線が施されている。

口縁文様帯を作るものうち、150のようにクシがき沈線文を4条施しているものもある。

色調は、全体に赤褐色を呈するものが多く、次に黄褐色を呈するものがある。また、150は灰黄色を呈するもので他のものとは色調を異にする。胎土には、石英・長石粒を含む。整形は、内外面とも非常に良好でへら磨き状の整形がみられ光沢をもつ。器厚は、0.7 cm~1.2 cmを計



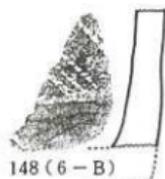
145 (7-A)



146 (6-B)



147 (6-B)

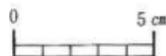


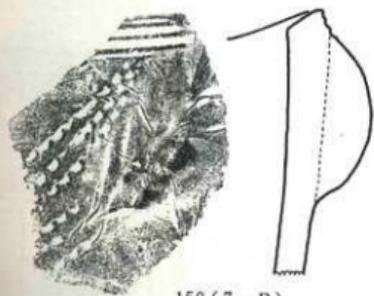
148 (6-B)



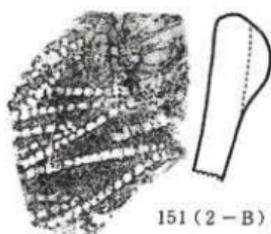
149 (9-B)

第33图 II e 類土器 (1) ($\frac{1}{2}$)





150 (7-B)



151 (2-B)



152 (7-A)



153 (7-A)



154 (5-B)



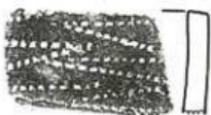
155 (5-B)



156 (2-B)



157 (9-B)



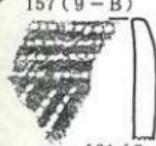
158 (5-B)



159 (7-B)



160 (5-B)



161 (7-B)



162 (7-A)



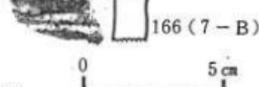
163 (9-B)



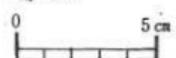
164 (9-B)



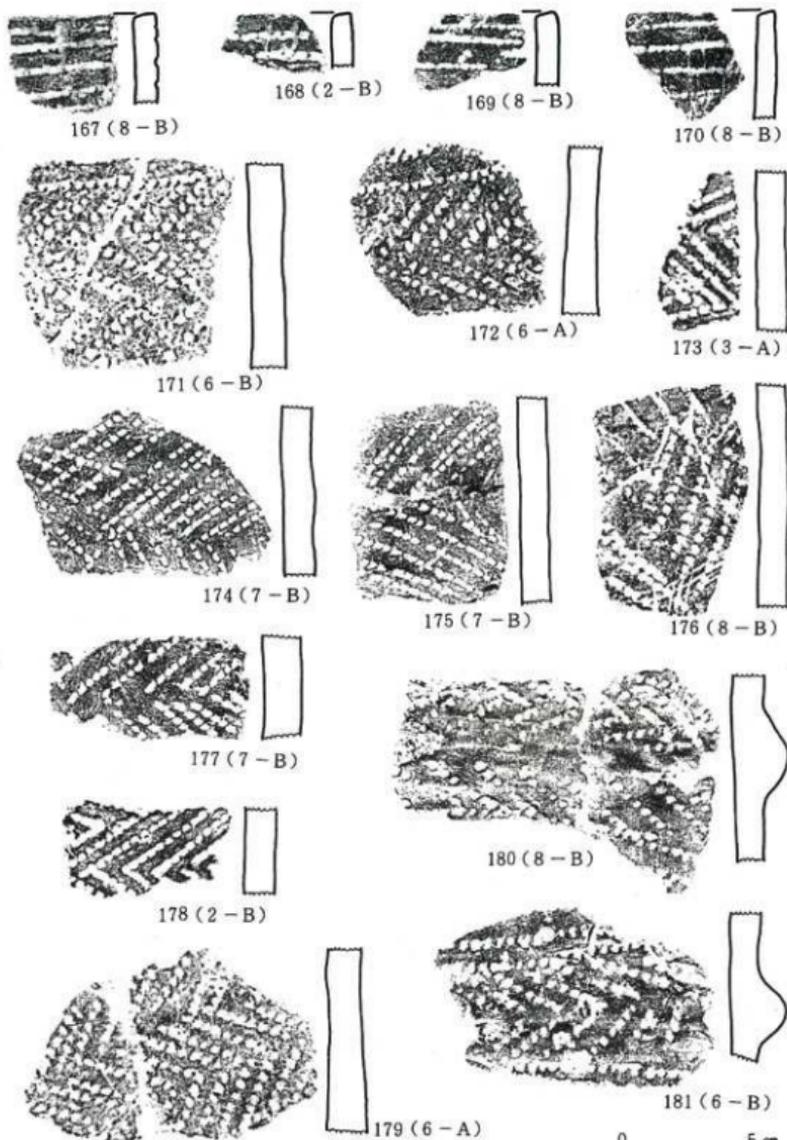
165 (9-B)



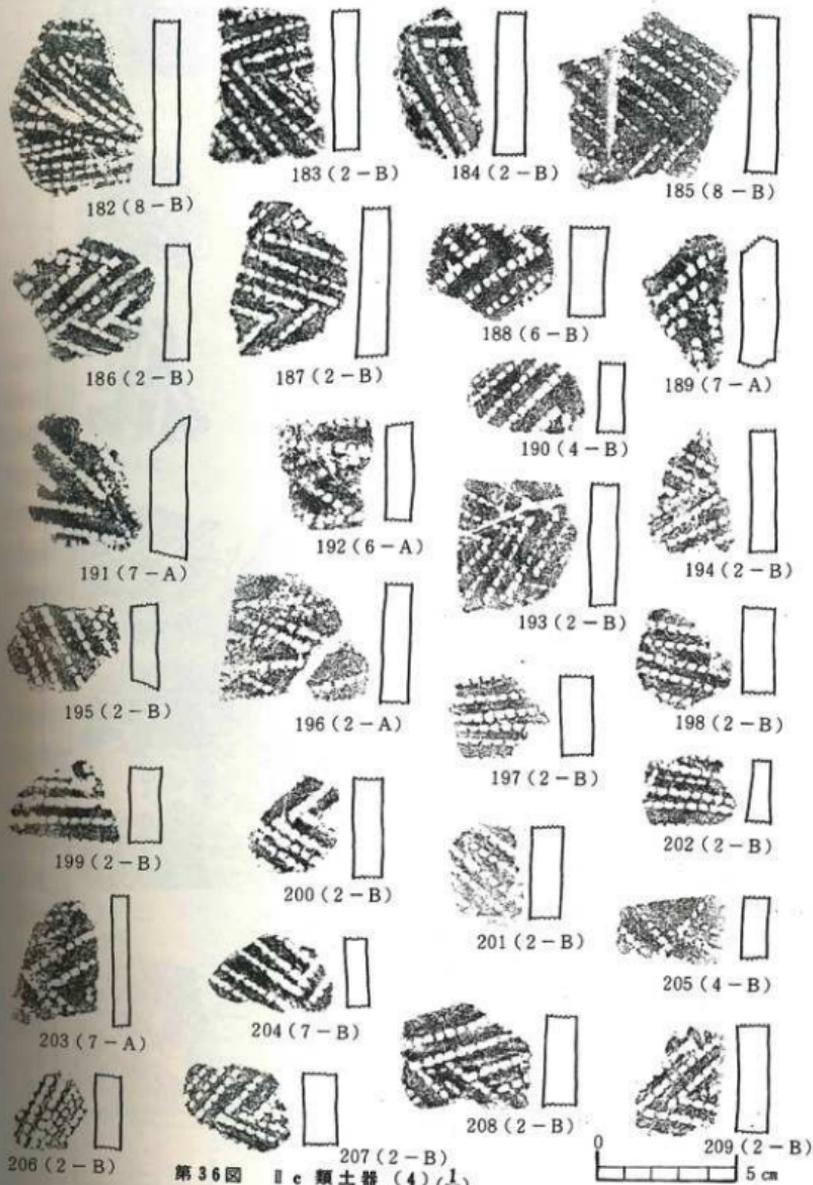
166 (7-B)



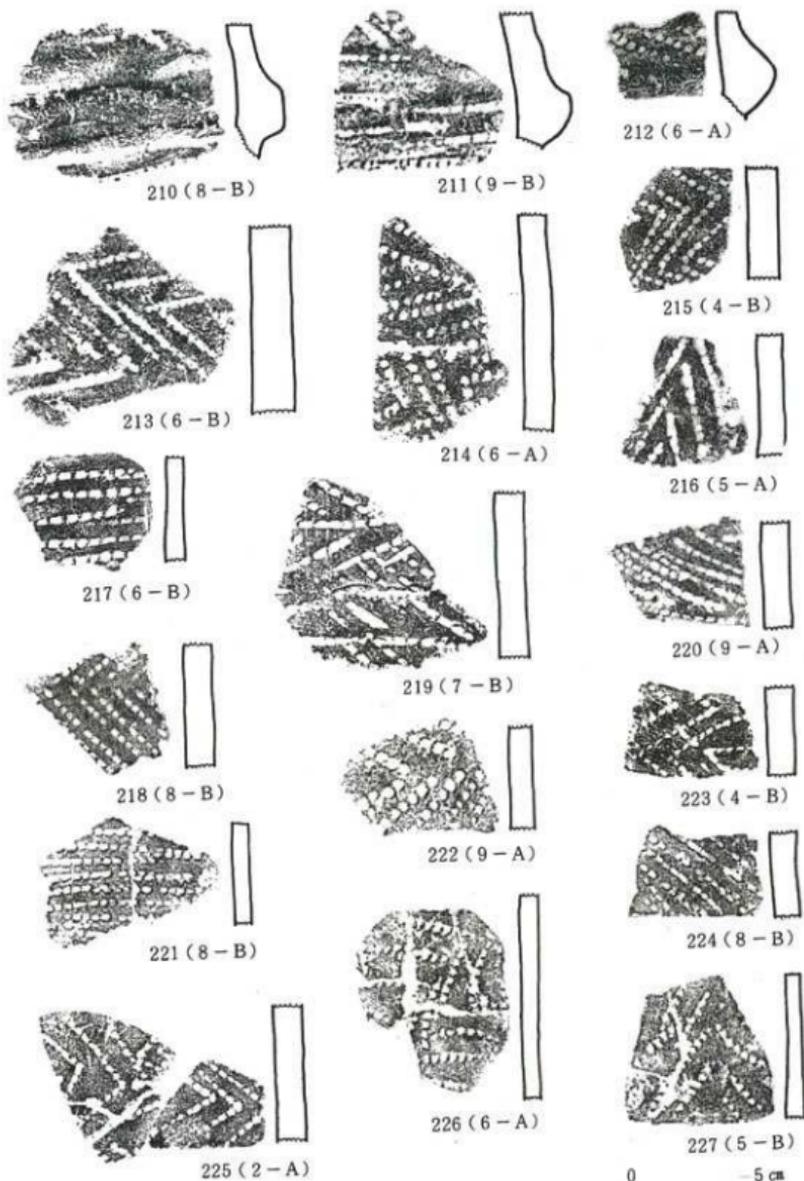
第34圖 II c 類土器 (2) (1/2)



第35圖 II c 類土器 (3) (1/2)



第36図 c 類土器 (4) (1/2)



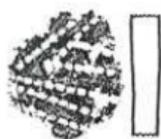
第37圖 IIc 類土器 (5) ($\frac{1}{2}$)



228 (2-B)



229 (2-B)



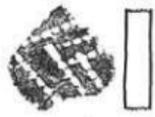
230 (2-B)



231 (2-B)



232 (2-B)



233 (2-B)



234 (2-B)



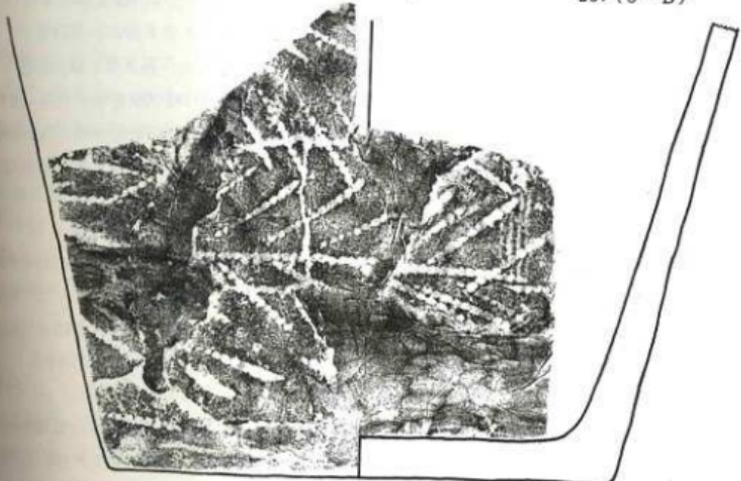
235 (2-B)



236 (2-B)



237 (8-B)



238 (9-A)



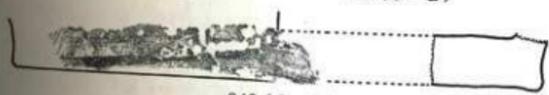
239 (8-B)



240 (2-B)



241 (2-B)



242 (2-B)



第38圖 II c 類土器 (6) (1/2)

るものがあるが、1 cm内外のものが多い。

150・151・152には、II b類(114)と同様口縁部に縦位の突起がみられる。150は、巾2.5 cm、長さ6 cm、高さ1.7 cmとこれまでのうちで最も高くしっかりした突起である。

【胴部(171~235)】

胴部断面は、ほとんど直線的で弯曲したり外反したりするものはほとんどみられない。ただし、突起が着く部分でわずかに内弯するもの(210~212)と外反するもの(145)がある。

器厚は、薄いもので0.6 cm、厚いもので1.5 cmのものがみられるが全体に1 cm前後のものである。色調は、全体に赤褐色から黄褐色を呈している。胎土には、石英・長石粒が観察される。整形は、口縁部同様非常に良好でへら磨き状の整形がみられ光沢をもつ。

文様は、そのほとんどが貝殻腹縁による縦位の鋸歯文が施されている。

胴部に突起をもつものは、6点みられる。180・181・210・211・212は、横位の突起をもつもので、巾が2.5 cm~3.2 cmで、長さが現存で11 cmのものが一番長く、高さが0.8 cmから1.2 cmのものがある。突起断面は、三角形を呈するものが多く、台形を呈するもの(210)も1点含まれる。145は、突起の全体を知る横位のものであるが、巾2.6 cm、長さ8.5 cm、高さ0.8 cmを計る。突起には、無文ですますもの(180・210・212)と平行棘突線を施すもの(211・145)と鋸歯文を施すもの(181)とがある。149は、1点だけ縦位の突起が着くものがみられた。この突起は、巾2.5 cm、長さ5 cm、高さ1.2 cmを計り突起上には、施文はみられない。

【底部(236~242)】

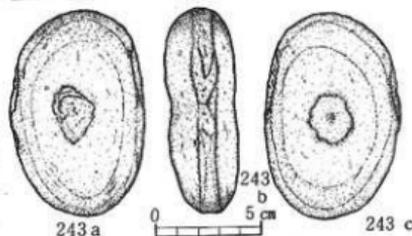
底部は、平底で平坦面をつくる。底部径は、238が18 cm、242が19 cmとかなり大形のもののみられる。底部の厚みは、1.2 cm~1.9 cmとかなり厚いものがみられる。

底部器形は、底部から直線的に外方に拡張して胴部に至るもの(236・238~240)と底部下端でしまり弯曲してそのまま外方に拡張しながら胴部に至るもの(237・241・242)とがみられる。

器外面文様は、底部下端まで縦位の鋸歯文が施されている。色調は、赤褐色から黄褐色を呈している。器内は、内外面ともへら磨き状の整形が施され光沢がみられる。胎土には、石英・長石粒が観察される。

②石器(243)

石器は、7-A区から蔽石1点が出土した。蔽石は、長径9.8 cm、短径6.5 cm、厚さ3.4 cm、重さ290 gを計り、硬質砂岩の楕円礫を素材としたものである。a面の中央部よりやや左側とb面の中央部には、窪



第39図 N層出土の石器

みがみられ、側面には、打痕跡が認められる。また、a、b両面右側端と左側端に打痕が認められるが、いずれも使用痕と考えられる。

◎Ⅱb層出土の遺物

6~10-C~E区にかけて、縄文式土器と石器が出土している。遺物は、8・9・10-C・D区に集中するようである。

①土器

Ⅱb層から出土した縄文式土器は、次の5つに類別された。Ⅳ層出土の土器に準じてⅢ類~Ⅴ類と呼称して記述することにした。

Ⅲ類土器(条痕文系)：器面内外に条痕文を施すもの(244~250)

Ⅳ類土器(連点文系)：器外面、口唇部に連点文を施すもの(251~259)

Ⅴ類土器(沈線文系)：器外面に沈線で文様を施すもの(260~263)

Ⅵ類土器(突帯文系)：器外面に突帯文を施すもの(264~289)

Ⅶ類土器(摺糸文系)：器外面に摺糸文を施すもの(293)

以上のように、5つのタイプがみられるが、いずれもⅡb層に混在して出土したものを類別したものである。次に、これらの土器を類別に記述することにする。

Ⅲ類土器(244~250)

244~246は、いずれも口縁部から胴部にかけての破片である。

244は、底部を欠くが口縁部が開き底部が尖底に近い形状のいわゆる円錐形の器形を呈する。口縁径は15.5cm、現存高は13cm、器厚は0.9cmを計る。器形は、胴部下方で若干丸味をもって張り、上方で弯曲しながら口縁部へ開き、口縁端部は丸味をもって終る。口唇部には、キザミ目はない。器内外は、あらい条痕が縦位と斜位に施されている。

245は、口縁径13.5cm、現存高8cm、器厚0.6~0.8cmを計る。器形は、胴部中央で丸味をもって張り、頸部付近で弯曲しながら口縁部で外反する。口唇部には、キザミ目はなく丸味をもって終る。器内外面には、横位の条痕文が施されている。

246は、口縁径10.5cm、現存高4.5cmを計る細片である。器形は、胴部で丸味をもって張り、口縁部は、そのまま内彎して終る。口唇部は、若干平坦面をつくりキザミ目が施される。器面は、口縁部外面と内面に横位の条痕が施され、胴部外面は、縦位および斜位の条痕が施されている。色調は、黒色および黒灰色を呈し、胎土には砂粒を含み若干あらい。

247~250は、底部破片である。

247と248と249は、胴部へ大きくひろく尖底土器である。尖底部分の厚みは、1.7cm~2.1cmを計る。器面には、うすい条痕が施されている。色調は、黒褐色を呈し、胎土には、若干砂粒が観察される。250は、丸味を持った平底を呈するものである。なお、249は、尖底部の近